HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文学部．第一部　通史．一　独立と模索（一九五〇～一九五五）．二　混迷の時期（一九五六～一九六四）．三　再建と拡充（一九六五～一九六八）．四　大学紛争と改革問題（一九六九～一九七四）．五　現状と展望．第二部　人と研究．はじめに．一　哲学科Ⅰ．二　哲学科Ⅱ（一九七七年四月、行動科学科になる）．三　史学科．四　文学科．五　教養課程担当教官．六　北方文化研究施設．あとがき．付録．年表
Citation	北大百年史，部局史，191-275
Issue Date	1980-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29950
Type	departmental bulletin paper
File Information	bukyokusi_p191-275.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文学部

目次

第一部　通史

一　独立と模索（一九五〇～一九五五）……196
　文学部の独立―学生と授業―予算の欠乏―新制大学院の設置―教養課程の問題―学部内規の制定
二　混迷の時期（一九五六～一九六四）……204
　第一次藤井教授問題―混迷の時期―再建の努力
三　再建と拡充（一九六五～一九六八）……210
　学部、大学院、施設の拡充と新設―文学部建物の新営―学部図書の充実―国際交流の進展
四　大学紛争と改革問題（一九六九～一九七四）……216
　文学部の封鎖―封鎖解除と授業再開―学部長選挙問題―改革への動き
五　現状と展望……225

第二部　人と研究

はじめに

一　哲学科Ⅰ……230
西洋哲学―中国哲学―印度哲学―倫理学―宗教学

二　哲学科Ⅱ（一九七七年四月、行動科学科になる）……238
心理学―社会学

三　史学科……241
日本史学―東洋史学―西洋史学

四　文学科……245
国語国文学―中国文学―英語英米文学―独語独文学―ロシア文学―言語学

五　教養課程担当教官……255

六　北方文化研究施設……262
第一部門（考古学）―第二部門（文化人類学）

あとがき……265
付録……266
一　一九五一年度講義時間割　二　一九五一年度講義題目　三　蔵書数　四　各年次の職別職員数
五　文学部卒業生就職状況
年表……271

第一部　通史

一　独立と模索（一九五〇～一九五五）

文学部の独立　一九五〇年（昭和二五）四月一日に法文学部は、文学部と法経学部に分離した（法律第五一号）。文学部に哲学一〇講座・史学五講座・文学五講座が置かれ、哲学科・史学科・文学科の三学科により構成された。初代文学部長に伊藤吉之助教授が就任した。四月の発足時における教官陣は次のごとくである。

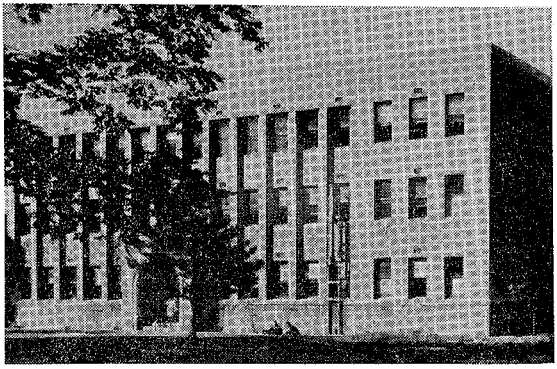
〔哲学科〕　（教授）　（助教授）

第一講座（西哲第一）	伊藤吉之助	細谷　貞雄
第二講座（中哲）		竹内　照夫　佐藤　一郎
第三講座（印哲）	坂井　尚夫	
第四講座（西哲第二）	武田　信一	斎藤　信治
第五講座（西哲第三）		斎藤　忍随
第六講座（倫理）	須田豊太郎	
第七講座（心理第一）	結城　錦一	田中　良久
第八講座（心理第二）		
第九講座（社会）	鈴木栄太郎	関　清秀

第十講座（宗教）　中川　秀恭

〔史学科〕

第一講座（史学概論）　板倉　勝正　護　雅夫
第二講座（日本史第一）　阿部　武彦
第三講座（日本史第二）　新城　常三
第四講座（東洋史）　藤井　宏
第五講座（西洋史）　堀米　庸三　鳥山成人

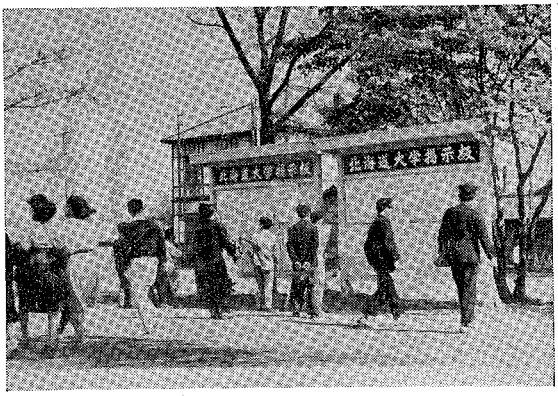


分離当時の文学部・法経学部校舎
（1950年）

〔文学科〕　（教　授）　（助教授）

第一講座（英米）　柏倉　俊三
第二講座（国文）　風巻景次郎
第三講座（中文）　杉浦正一郎
第四講座（独文）　猪俣　庄八
第五講座（露文）　小栗　浩
中国語　木村　彰一　北垣　信行（講師）
言語学　伊藤　正（講師）
　　知里真志保（講師）

この表でわかるように、講座部分の欠員は約一〇名で、スタッフはしだいに充実されてきている。しかし、全体として新進助教授層が大きな部分を占め、推進力となったことがうかがわれる。このことは、よい意味でも悪い意味でも、文学部のその後の特徴となった。



文学部の向い側全学掲示板付近
（角帽姿、女子学生のヘアースタイル、スカートにも時代が）

これらの教官の生活は苦しく、新しく赴任した教官の住宅の確保は、とくに難しかった。大学正門横の職員集会所や研究室に寝泊りするなどのことが一般的であった。ただ一九五〇年になると、北二六条の大学村に一〇万円住宅といわれるもの、北一七条のハーモニカ長屋といわれるものなどが完成してきて、やや曙光が見えてきたのである。

学生と授業

学部が独立した翌年、一九五一年（昭和二六）からは、新制大学の移行学生を受け入れることになり、一九五三年三月までは新旧両制度の学生を収容していた。もちろん旧制大学生で正規の年限で卒業しないものもあったから、両制度の並行はもっと長かったと見られる。一九五二年の学生数を見ると、旧制の学生一一二名（選科生五名を含む）、新制の学生一二二名、計二三四名の学生を在籍させている。旧制の学生のなかには、一九四九年以前に入学したもの、つまり留年者が三〇名含まれている。また、この一〇七名（選科生を除く）の旧制学生のうち、翌一九五三年三月に卒業しなかったものも約三〇名である。

戦後の混乱期の影響はなお残っており、両制度が並行しただけでなく、学生の出身や性格も多様であり、学生生活も苦しかった。就学を続けることだけでもなかなか容易でなかった時期である。文学部が独立してまもない一九五〇年五月、教授会は一年度分（一八〇〇円）以上の授業料滞納者二〇名を除籍処分にしている。しかし、このことを報じた大学新聞は、授業料の滞納が文学部に限るものでなく、全学的な現象であることを訴えている。

新制の移行生をも迎えて、授業の体制がやや整った一九五一年度の講義題目と時間割を、編末に掲げる。講義と演習・講読とをほぼ同じ比重で配列し、講義の中では概論・概説以外に特殊講義に重点を置くという形をとっている。専門的な研究内容と研究方法を伝達するために必要なスタイルとして、旧制大学いらい、文学部系で行われてきたものである。一方、限られたスタッフによって展開される授業だけでは学問分野を広くカバーすることはできないために、学生の自主的な学習が要求され、卒業にあたっては多少とも独創性のある卒業論文が求められる、という点でも旧制いらいの伝統を引き継いだと考えられる。

当時の在学生の思い出によると、新設の文学部として、他大学に劣らない高水準を要求するかなりの厳しさと、創設期の苦労を分かち合うかなり牧歌的な雰囲気とが併存していたようである。

学生たちの中には、戦後学生運動の流れに身を投じているものもあった。一九五〇年六月のイールズ事件では、文学部からも退学一名、無期停学一名（同年十月には復学が認められた）の処分者を出した。学部内でも学生自治会結成の機運が起こり、一九五一年の暮れには、教官学生協議会が設けられ、教授会と学生自治会との間のパイプとなり、以後、破防法や学生運動取締について、また掲示規制や学生の選挙権問題などについて、学生の要請や要求にこたえる役割を果たした。

予算の欠乏

文学部に属する教官にもっとも必要なものは研究教育用の図書であるが、これまで文学部関係の本の蓄積のない北大における新設の文学部では、図書の充実のために涙ぐましい苦労を重ねることになった。

初年度である一九五〇年度の学部予算使用計画は、三〇九万六五五七円（うち未払分一四万五〇〇〇円を含む）であるが、そのうち修繕関係は二九万五〇〇〇円余（官舎の修理も含む）に達している。教官の不足について道外からの臨時

講師経費一一人分三九万六三五二円、新任教官の赴任費二八万二〇〇〇円を要した。備品として書架・椅子・机・タイプライターなどに約四一万円を計上している。さらに電話の新設一五万円、以上だけで既に一五三万円余になっている。その他消耗品・電気料・賃金などを差し引いて教官の研究図書費は一人当たり一万円（計四〇万円）となっている。なお寄付金よりの支払い予定は、次のとおりで、まとまった図書の購入は寄付金に頼るほかなかったことがわかる。



1950年ごろの文学部図書室
（今はもう見られないダルマストーブと蒸発皿）

文庫　一、〇〇六、五四〇円　（内訳　小山文庫　八五六、八一二円　高橋文庫　一四九、七二八円）
アパート建築原木代　二〇八、四九九円
職員集会所湯殿修理　二七、五〇〇円　ともに所要金額の二分の一

右の「文庫」とは個人所有の図書を一括購入して、それを何々文庫と名付ける、という方法で充実が図られたのである。先輩の学者が死亡した場合、学部に系統だった研究文献を入手する上で、これが最も優れた方法であった。このような欠乏状況のために、限られた予算の配分をめぐって、学部内の人間関係の円滑さが失われるといった事態もまれではなかった。

その後、一九五五年度までの予算・図書費の推移を見ると、学部総予算は五〇〇万円前後から七〇〇万円前後を上

文学部図書関係予算の推移

年度	文学部予算	図書購入費	教官割当図書費（1人当たり）
	円	円	円
1950	4,334,096	1,406,540	10,000
1951	7,351,000	2,303,600	20,000
1952	5,843,300	2,425,000	20,000
1953	6,634,350	3,000,000	25,000
1954	4,759,850	2,000,000	20,000
1955	5,136,060	1,843,200	20,000

下しているが、図書購入費はだいたい二〇〇万円前後であり、その半ば以上が継続して購入する内外の図書や特別な図書の購入に充てられ、教官個人への割当図書費はほぼ二万円に固定していた。

新制大学院の設置

新制大学院の出発は、一九五三年（昭和二八）であるが、文学部教授会ではその前年の春から新制大学院の構想について検討を始めている。当初の予定では、哲学・心理学・社会学・史学・文学の五専攻を考え、それぞれの専攻の内容の充実に心を配った。やがて年末には、北大としての大学院設置案がまとまり、一九五三年二月には大学院設置委員の視察を受けて、最終的な構想がまとまった。文学研究科は、哲学・東洋哲学・心理学・社会学（修士課程のみ）・史学・英米文学・国文学の七専攻が認められ、それぞれの入学者が四月二十四日の教授会で決定された。旧制大学院はまだ継続していたが、新制の志願者には旧制学部卒業生から志願した者も含まれており、うち一五名が新制大学院の一期生となった。

二年後の一九五五年八月には、社会学専攻の博士課程が認められ、史学専攻が国史学・東洋史学・西洋史学の三専攻に分離された。独文学専攻・中国文学専攻が設置されるのは、さらに一〇年後のことである。

教養課程の問題

一九四九年（昭和二四）新制大学の成立に当たり、教養学科の教官は、人文・社会系は法文学部に、理系は理学部に属することになったが、教養学科の運営方針は確定していなかった。法文学部は、学生も法文学部

及び理学部に分属させることを主張していたが実現に至らなかった。教養課程の学生は、しばらく学長に直属するものとされ、学生に対する教務や学生指導に関する事項は、教養課程担当教官の非公式な全体会議によって運営され、全学的には各学部長などを委員とする連絡委員会が設けられていた。

さらに、一九五〇年には法文学部が文・法経の両学部に分離し、人文系教養課程担当教官の選考や所属の母体が不明確になった。教養課程担当教官の所属や、教養課程の組織・運営の基本方針は、全学的な検討に委ねられたが、この間に文学部教授会は教養課程の組織のさまざまな形態について検討を重ねた結果、教養課程の独立を可とする意見が多数を占めた。

新制大学特別委員会は、「新制大学のあり方」という方針をまとめ、一九五一年の春、これが評議会の承認を受けてその後のいわゆる教養課程の全学運営方式の基礎となった。文学部がこの方針を不満としたため、特別委員会は「一応これを承認実施することとする。但し文学部の意向をくみ、一年後にこれを再検討する」旨を議事録に付記することになった。

「新制大学のあり方」は、一般教養部教官は関係各学部に属することとしているが、文学部教授会はこれを暫定的なものとして受け入れることにし、一年間試験的に次のような運営を行うことを決定した。教授会は専門課程の教授・助教授をもって構成し、つまり教養課程担当の教官を含めず、教養課程担当教官の人事選考は専門・一般合同の教官会議で行い、これを教授会で決定することにしたのである。

学部内規の制定

右のような運営のもとでは、教養課程担当教官の発言はきわめて限られたもので、一九五一年（昭和二六）六月の学部長選挙に当たって、教養課程担当教官を代表して山岡教授から「今日の学部長選挙につき、文学部教官会議を通ずる方法等を以て一般教養教官の意向を反映させて貰いたい」旨の申し出があ

ったが、受け容れられなかった。翌年度に向けて教授会は、あらためて教養課程担当教官の身分について合併・分離などの論議を重ねた結果、一九五二年四月から旧制学部の存続する期間ということで、次のような内規を定めた。すなわち、教授会の構成については、

教授会は専門教養講座所属の教授助教授の全員及び一般教養担当の教授を以て構成する。

とし、学部長選挙については、

一、学部長候補者は専門教養講座所属の専任教授の中から選出する。

二、右候補者は教授及び助教授全員の三分の二以上の投票により過半数を得たものにつき、教授会が出席者のみを以て決する。

とした。しかし、問題はこれでかたづいたわけではなく、旧制学部の消滅した翌一九五三年度にかけて、種々の論議を重ねた。とくに一九五三年六月に行われる予定だった文学部長選挙に際して内規問題が表面化し、学部長選挙を二週間延期してその間に検討を重ね、七月十日に次のような内規制定の合意が成立した。すなわち教授会構成に関しては、

教授会は教授を以て構成する。人事及び教育その他に関しては専門教養に関することは専門教養の助教授を、一般教養に関することは一般教養の助教授を加えて夫々その都度構成する。但し学部長評議員の選挙の場合は別に定める。

とし、また専任教授の全部が学部長選挙の被選挙権を持つことになった。これはほぼ今日の文学部内規の原型を定めたもので、この段階での内規問題と専門・教養問題は、一応結着を見た。当時専門教養と呼んだのは現在の専門教育課程のことである。なお、文学部では、発足当初から専門課程を「シニア」、教養課程を「ジュニア」と呼ぶ慣行があった。

二　混迷の時期（一九五六～一九六四）

第一次藤井教授問題

一九五六年（昭和三一）より一九六四年に至る間において、いわゆる藤井教授問題が起こった。この時期における文学部はこの問題を中心に各種の困難に翻弄されたのである。事件は第一次と第二次とに分かれ、第一次は一九五六年六月～一九五八年三月の間、第二次は一九六一年十月～一九六四年十一月の間である。藤井宏教授が当事者の一員であったが、一次と二次とでは、事件の性質も、他の関係者も異なっていて、一貫した事件であると単純にいうことはできない。

一九五六年六月ごろ、既に以前から東洋史学専修科を中心としてそれまでに大小各種のトラブルがあったが、藤井教授は支那学教官研究室の使用禁止を卒業生の北海道学芸大学教官に申し渡し、さらに七月二十日に東洋史学専修科学生二名にも申し渡したことから、学生たちが反発し、北大職組も立ち上がるという事態になった。

支那学教官研究室というのは、東洋史・中国哲学・中国文学の諸専修科の基本的図書・辞書・索引など一カ所に集めて、図書掛職員一名を置き、教官の研究に便宜を与える目的で開設されたもので、関係専修科の学生の勉学に必要な設備であり、道内の研究者にも有効に利用されていた。管理責任者として特定の教官はいなかったので、東洋史学専修科（当時教授二名助教授一名の構成）藤井教授個人の処分による事件が発生し拡大した。この研究室はここで述べる第一次の事件の収束後に廃止された。

七月以後に起こった事態を追ってみると、七月二十三日に北海道大学の杉野目学長に対し学芸大学の田所哲太郎学

長の抗議があり、文学部学生大会があったり、藤井宏教授が陳謝文をだすなどのことを経て、二十八日辞表提出に至った。夏休みを経て九月二十日に文学部学生大会が開かれ、九月二十三日に文学部教授会は辞表を受理して、表面上は一応収まった。ただしこの辞表はただちに文部大臣に上申されず、柏倉文学部長の手もとに当分の間保留されることになっていた。

九月二十九日、予科及び教養部におけるドイツ語教育に多大の功績があり、また学部・教養部の運営に参与して重要な職責を果たしていた山岡直道教授が亡くなり、翌年二月一日に学部長も柏倉俊三教授から、武田信一教授に再度交替した。三月三十一日には文学部に言語学一講座が増設され、知里真志保が教授となった。

一年ほど学部内は静かであったが、一九五七年（昭和三二）の九月に藤井教授が文部大臣あてに辞意の撤回を上申したことにより、再度学部内は騒然たる状況となった。

文学部学生自治会の藤井教授の罷免申し入れ、無期限スト決議、職組の追放決議などが行われた。教授会は処理に当たって苦悩に満ちた審議と討議を重ね、ついに十二月十四日夜、疲労で別室に臥している武田学部長に対し、「教授の徹底的善処を要求し、その満足な実現のために必要とされる措置を文学部長に一任する」という結論を出した。翌一九五八年三月十四日武田文学部長はいろいろ考慮し、藤井教授とも話し合った結果として、「辞職を勧告する理由はないと認める」という結論を表明、教授会はこれを認めた。

武田学部長の裁定後、東洋史学専修科の学生は一人残らず西洋史と国史とに転科した。このような状態でともかくもしだいに平穏がとりもどされていった。

当時の学生数を示すと次頁の表のとおりである。

1958年6月25日現在の学生数

専修科	3年目	4年目	計
哲学科			
西洋哲学	7	7	14
中国哲学	1	—	1
印度哲学	—	4	4
倫理学	1	—	1
実験心理学	3	17	20
宗教学	1	3	4
社会学	31	35	66
史学科			
国史学	6	15	21
東洋史学	—	—	—
西洋史学	3	10	13
文学科			
国文学	22	26	48
中国文学	1	2	3
英米文学	23	59	82
独文学	2	4	6
露文学	3	12	15
計	104	194	298

（備考）　4年目中には卒業延期の者を含む

東洋史学専修科に在籍学生が皆無であるほか、専修科によって学生数にかたよりがあることがわかる。すなわち社会学・国文学・英米文学に学生が集中する一方で、三、四名以下という専修科もあった。後に学生定員が増加してからは、この傾向は薄れ、しだいに平均化するようになっていった。

混迷の時期

新制大学が発足して四年、文学部が法文学部から分離して三年、一九五三年（昭和二八）には大学院文学研究科も設置された。さまざまな矛盾や問題点を抱えながら、充実への道を模索してきた文学部は、一九六〇年代にさしかかって大きな転機を迎えようとしていた。

内には、文学部建物の新営が計画され、新営特別委員会が計画暫定案を作成し（一九六〇年）、また文学部委員及び委員会に関する規定が作られる（一九五九年十一月）など機構的にも整備され、外では、七大学学長会議で杉野目学長が戦後設置の三大学人文系学部の充実を提唱した（一九六〇年十月）のをうけて、名大・阪大・北大の三大学文学部長会議で講座増設が協議され、一九六一年八月には三大学の学長が文部大臣に人文社会系学部の整備について陳情書を提出した。

文学部としては、五カ年計画で図書一〇万冊の購入と、史学第六（塞外史）・国語学・社会学第二（社会人類学）・英

語学の四講座の増設を要求することとなり、さらに独語学・中国語学など五講座の増設要求も追加された（一九六〇年十一月）。そして、十二月には、図書費一〇〇万円が認められ、また講座増設要求についても、一九六二年三月には史学一講座が認められて、文学部は哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科六講座という構成になった。

一方「委員及び委員会に関する規定」についてみれば、一九五八年から文学部（講座制部分）に若干の委員及び委員会を置く案が教授会で審議され、一九五九年三月には「委員」に関する部分が決定され、同年十一月には「委員会」に関する部分がおおむね承認されたが、なお一年間の試験期間を置いて若干の修正が加えられた後、その継続的運用が決定された。

委員は「所定の任務の範囲内で学部の運営につき学部長を補佐する」ものとされ、研究室委員（任務―研究室の整備・割当・拡充・使用等に関すること）、図書委員（図書及び付属施設の維持・拡充）、紀要委員（紀要の編集・発行）、教官学生協議会委員、予算委員（学部予算案の編成）の各委員が置かれた。また委員会は「教授会の議事運営に資し、且つ各種委員間の調整を計るため」に置かれ、「教授会から付託された個々の案件につき、その都度調査あるいは立案することを主たる任務」としており、第一委員会（任務―諸講座並びに教授会に関する諸制度とその運用に関する事項）、第二委員会（諸講座〔大学院を含む〕の予算並びに研究施設の維持・拡充）、第三委員会（学生関係の諸件、とくに教官学生協議会を通じての教授会と学生代表との連絡）、第四委員会（教務関係の計画に関する事項）の各委員会が設置された。

しかし、このような文学部拡充の機運とはうらはらに、学部内の実情は、五〇年代の末から五名の教官が他大学へ転出するなど、むしろ停滞の気分が漂っていた。この時期に、言語学講座の教授知里真志保（一九六一年六月）のほか、初代文学部長名誉教授伊藤吉之助（一九六一年七月）、元文学部長武田信一（一九六三年七月）と、法文学部の創立以来学部の発展に寄与した人々が、相次いでこの世を去った。

その矢先に起きたのがいわゆる第二次藤井教授問題である。一九六二年二月、同教授の発言と行動によって教授会が混乱したのをきっかけに、文学部の各種教授会は同教授に対して弾劾決議、辞職勧告を行い、四月には教授会の決議をうけて学部長から学長あてに同教授に対する公務員法上の処分を上申する事態になった。学長は、評議会を開いて審査した結果、一九六三年五月、藤井教授を分限免職とするよう文部省に上申することを決定。文部省は国家公務員法に基づき同教授の処分を発令したが、文学部でも学部長をはじめ評議員が辞任し、学長が学部長事務取扱を兼任するという異常事態となった。一方被処分者は処分を不服として人事院に不利益処分の審査を請求し、以後数次にわたって公平委員会による口頭審査が行われ、学部自治を根幹とする大学自治の問題、国立大学教授の身分保障のあり方などをめぐって内外の注目を集めたが、一九六四年十一月、請求者が請求を取り下げたことによって、二年以上にわたって文学部を揺るがしたこの事件も決着をみた。

再建の努力

文学部が拡充へと羽ばたこうとしていた矢先に起こったこの事件は、文学部の抱えるさまざまな問題点を露呈した。事件後、文学部は評議会からも厳粛な反省を求められ、杉野目文学部長事務取扱を中心に直ちに異常事態の解消と学部再建に取り組み、この事件を、せっかく盛り上がっていた学部充実の機運を再び取りもどすための転機としようと努めた。学部長事務取扱は事件後ただちに東大・京大・東北大などの文学部長に学部再建のための協力を依頼、一九六三年（昭和三八）十二月には東大教授金子武蔵を併任の形で文学部長として迎えることになった。以後一年間、同学部長は研究教育の活発化、教官人事の推進、講座の増設などに尽力、学部再建のメドのついた翌年十二月、阿部武彦新学部長にバトンを渡して東大に帰った。

この間に、教授数がわずか九名から二〇名に増えたのをはじめ、専門教育関係の教官現員数は定員六六名に対して六〇名になり、一九五二年創刊以来年一回発行だった『文学部紀要』が年数回発行に改められ、また北海道を含むユ



大任を終えて文学部を去る金子文学部長
(1964年12月)

ーラシア北方圏の民族・文化を研究することを目的として、考古学・言語学・人類学・地理学などの部門を備えた付属研究施設「ユーラシア文化研究施設」の新設を文部省に要求するなど意欲的な計画が打ち出され、さらに国語学・英語学などの講座増設が申請されると同時に、文学研究科に独文学・中国文学・ロシア文学の専攻課程の設置を目指すなど、大学院の充実も図られた。

これら再建・拡充のための計画のうち、付属研究施設については一九六四年七月「ユーラシア文化研究室」が発足し、のちの北方文化研究施設の基礎が作られ、講座の整備増設については、言語学専修科が設置された(一九六五年三月)ほか、従来ナンバー講座だった史学講座が日本史学、東洋史学、西洋史学各二講座に整備され(一九六三年六月)、さらに文学科に国語学講座(博士講座)が増設された(一九六五年四月)。

こうして、文学部は長い混迷をくぐり抜けて、ようやく再建と拡充の軌道に乗ったといえよう。

三　再建と拡充（一九六五～一九六八）

学部、大学院、施設の拡充と新設

金子武蔵が大任を果たして一年の任期を満了したのち、学部長に選ばれた阿部武彦（一九六四年十二月）は、学部内の人の和を図りつつ、研究教育、人事、機構、施設の各面での学部の充実に力を注いだ。

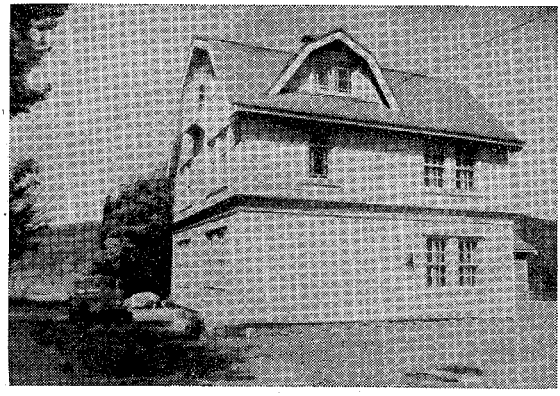
まず一九六五年（昭和四〇）六月には、大学院文学研究科に「独文学専攻」と「中国文学専攻」（各修士課程）が設置され、これには一九六七年四月、さらに博士課程が設置された。また同じ四月には「イギリス文学講座」が「英米文学講座」に改められたが、さらに一九六八年六月には文学科に英語学講座が増設され、先の国語学講座と合わせて、文学部は哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科八講座の構成となり、一九六八年三月には、従来、哲学科二五名、史学科一〇名、文学科三五名（計七〇名）の学生定員が、哲学科五〇名（Ⅰ〔Ⅱ以外の専修科〕二五名、Ⅱ〔実験心理学、社会学の二専修科〕二五名）、史学科三〇名、文学科五〇名と改められた。

こうした発展の傾向をうけて一九六五年十二月には、講座増、学科編成、学生定員などを協議する「学部の将来計画委員会」が設置されており、翌年二月には、文学部の将来計画として十年計画案が教授会で承認されたが、そこでは、一九七五年度を目途として、三一講座、一研究施設（四部門）、学生定員一五〇名（第四学科新設案）という文学部の青写真が描かれている。

この計画案のうち研究施設については、一九六六年に早くもその一部が実現した。一九六四年、ユーラシア北方圏

の民族・文化の研究を目的として先のユーラシア文化研究室が発足したが、この研究室は一九六五年には故知里博士の遺稿などを掲載した『ユーラシア文化研究』第一号を刊行するなど、旺盛な研究活動を続けていた。一九六六年二月、北方文化研究施設開設準備委員会が設置され、このユーラシア文化研究室を発展的に解消し、更に一九三七年（昭和一二）に本学に設置されていた北方文化研究室を合体する方針を決定、一九六六年四月五日に学部付属の教育及び研究施設として、北方文化研究施設（考古学部門）がおかれることになった（一九六七年二月、研究施設規程制定）。

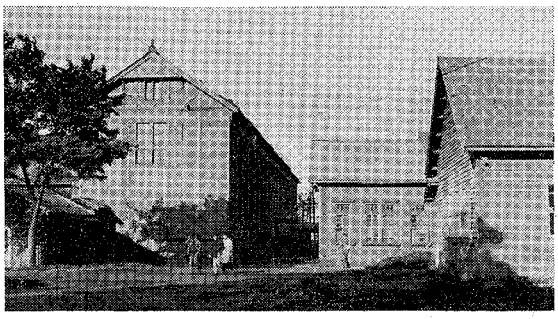
この研究施設の門出を祝福するように、思いがけない寄付の申し出があったことを記しておかなければならない。



北方文化研究施設二風谷分室
（旧マンロー邸　1966年9月）

それはイギリス大使館文化参事官E・W・F・トムリンで、さきに同大使館のJ・フィゲスとともに入手した日高管内平取町二風谷の土地・建物を北方文化研究施設に役だててほしいという申し出であった。この土地建物は一九四三年までアイヌの医療に力を尽くしたイギリス人医師マンローが所有していたもので、文学部ではこの申し出を受けることを決め、一九六六年九月、北方文化研究施設分室として旧マンロー邸（土地一万九三七一平方メートル、建物二八三平方メートル）の寄贈を受けた。現在、日高地方の実地調査のための施設として使用されている。

さらに一九六九年五月には、文学科に独語学講座が増設され（同年四月一日適用）、文学部の構成は哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科九講座となったが、これを機に、同年三月には文学部規程の全部が改正されて、「専修科」が「専攻課程」に改められ、専攻課程のうち、「国文



文学部旧校舎（木造第三棟）西側
（取り壊し直前、夕陽を浴びて）

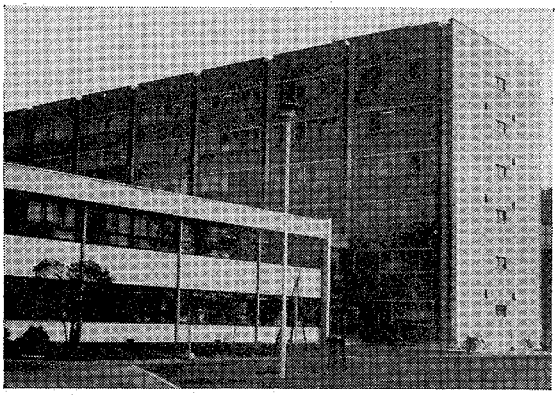
学」が「国語国文学」に、「英米文学」が「英語英米文学」に、「独文学」が「独語独文学」に、「露文学」が「ロシア文学」にそれぞれ名称が変更された。また同年八月には、大学院文学研究科に「言語学専攻」（修士課程）が設置された（同年四月一日から適用）、一九七一年四月には同専攻に博士課程が設置された。また一九七三年四月には、北方文化研究施設に文化人類学部門が増設され、文学部は三学科二五講座、一研究施設（二部門）となって、一九七五年を目途とする一〇年計画案の実現に向かって、着実に歩を進めていった。

文学部建物の新営

法文学部発足以来、文学部の教室、研究室、事務室は、法、経済両学部と旧予科校舎を共用してきたが、学部の発展につれてしだいに手狭になり、一九五九年（昭和三四）には増築された図書館新館の三、四、五階に教官研究室を借用するなどの応急措置がとられてきた。しかし大学全体のキャンパス整備計画（一九六〇年の北大十カ年計画）が進むにつれて、文学部にも、法、経済、教育各学部とともに、建物新営の計画が持ち上がり、新営特別委員会が設置されて、一九六〇年には新営暫定案が作成され、一九六三年二月には委員会提出の文学部建物新営計画案が教授会で承認された。同年、教養部新館が落成し、続いて研究棟が増築されたのに伴い、教養課程担当の文学部教官の研究室は、一九六四年に新館へ移転した。文学部建物の新営については、一九六三年一月に設置された本学施設計画委員会との連絡のもとに、その後、新営計画、整備計画、移転計画などについて絶えず教授会に説明、報告を重ね、その了承を得ながら作業が進められ、一九六六年十月には研究棟の研究室配置案も了承されて、翌一九六七年十月十四日、学内

中央道路東側、旧低温科学研究所そばにようやく文学部教室研究棟六階建て四六一二平方メートルの落成をみた。十二月六日から十六日にかけて新館への移転作業が行われ、新たな環境での研究教育の充実が期待された。建物新営に伴い、建物・研究室の門限設定、鍵の取扱規程の制定をめぐって、教官、助手、学生、事務各層の意見調整のため、協議が繰り返される一幕もあった。

なお、新館には当初管理棟が欠けていたため、翌年度にはその新築と、講座増に伴う研究棟の増築が計画され、一九六九年三月二十日、文学部教室研究室棟三二八平方メートル及び文学部管理棟七四〇平方メートルが落成し、現在の文学部の姿ができ上がった。



新装なった文学部研究棟・管理棟

学部図書の充実

一九六〇年（昭和三五）、戦後設置の三大学人文系学部の充実が提唱され、文部省がこれにこたえて本学部要求の図書費一〇〇万円を承認したあとも、文学部の研究の生命ともいうべき図書は、毎年度の図書費のほか、大学院基礎充実費、本部からの特別配当など（一九六一年三一〇万円、一九六四年五二〇万円など）による購入もあって、着実に増加していった。この中には、一九六三年死去した元教授武田信一の蔵書（武田文庫）の購入など、特色あるものも含まれている。一九六五年六月現在の学部の蔵書数は、貸出五万五〇五五冊、在庫六万二八〇五冊、計一一万七八六〇冊となっている。この間一九六一年には研究図書費の講座割当制が始まり、一九六八年には、いわゆる「人文社会科学系大学院研究科の基礎になっている学部を対象とし



解体される旧文学部
（ほのかな哀惜をこめて　1968年）

た特別図書購入費による図書購入計画」が、一九六八年度で終了するのに伴い、一九六九年度以降の図書購入計画が文部省に提出された。

一方、八年の歳月をかけた図書館新館が完成して附属図書館の整備が行われ、また文学部建物の新営が進むにつれて、一九六五年ごろから学部図書の管理運営の問題が浮びあがり、同年三月には、図書取扱の基本方針として、従来学部が管理していた図書を附属図書館へ全面管理換えすること及びこの方針の下で図書館側と折衝することが教授会で承認された。一九六五年七月には「図書館に移転する図書の検討のための委員会」（図書問題委員会）が設置され、一九六七年には、附属図書館へ管理換えした場合の図書を各研究室が借出し保管する、いわゆる二次保管についての規定（「図書の保管利用に関する細則案」）が作られた。管理換えの一部実現は、なお一九七四年まで待たなければならなかったが、ともかく、この方向は、戦後一種の分館制へと変わる以前の本学図書館の管理制度への復帰であり、一九五一年以来の附属図書館拡充の方針に添ったものであった。

国際交流の進展

この時期、わが国の国際社会との交流の活発化につれて、文学部でも外国人教師の雇傭、外国人留学生の受け入れ、各国からの学者の来訪などが目だち始めた。外国人教師としては、旧予科教師ハロルド・M・レーンが一九五一年（昭和二六）に復帰して新制教養課程の英語を担当し、ヘルマン・ヘッカーは戦時中も北大に留まって、予科廃止後には文学部専門課程の独語を担当した。しかし教養部における学生数の増加につれ、外国語教育の改善のために、一九六三年（昭和三八）ごろから、定員外の外国人講師、非常勤講師の雇傭が始

まった。さらに一九六四年にはドイツ語、一九六六年には英語の外国人教師の枠が各一名文部省から追加配当され、一九六五年にはフランス語外国人教師の枠一名分が新規に認められ、E・ヴェーニガー、J・A・スキールズ、F・パストルらの着任によって、外国語教育の充実が図られた。また一九六七年には教養課程のロシア語が第二外国語となったのに伴い、ロシア語の外国人講師の枠一名分もつき、シャルフェーヴァの雇傭が承認された。

ここで特記しておかなければならないのは、ヘッカーへ本学名誉学位が授与されたことである。ヘッカーは、一九三〇年に来日して以来、旧予科、法文学部、新制文学部を通じて三七年間にわたり教壇に立ち、高い教育理念と人間性豊かな人柄によって、学生のみならず多くの北大人に深い教育的感化を及ぼし、敬愛されてきた。一九六五年三月高齢のため退職と同時に、その顕著な教育研究上の功績によって、一九六三年制定された北海道大学名誉学位規程に基づき、北海道大学名誉博士の称号を授与され、特別記念講演会が開催された。退職後も大学関係者とのつながりは絶えなかったが、一九六七年四月二十日、全北大人愛惜のうちに死去した。



ヘルマン・ヘッカー名誉博士

外国人留学生については、一九六五年ごろから受け入れの動きが出始めていたが、一九六七年には国立大学協会による外国人留学生等受け入れに関する調査が第四委員会（教務関係）に付託され、同年三月には文部省から照会のあった国費外国人特別留学生セップ・リンハルト（社会学）の受け入れが決定されたのをはじめ、一九六八年にはオランダ人ルーカスも国費外国人留学生として承認された。

一方、国際学界との交流の輪もこの時期にはしだいに広がり、諸国の大学から来訪した学者の学術講演会が相次いで開催され

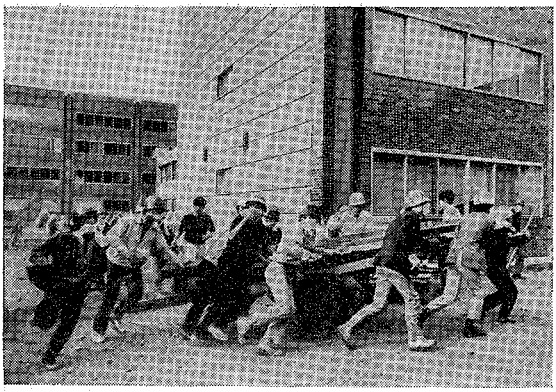
た。一九六七年五月には、アメリカ・コロンビア大学ドナルド・キーン教授（国文学）、イェール大学ベイントン名誉教授（宗教学）の講演会がそれぞれ文学部主催で行われ、同年九月にはベルリン自由大学のヘルビック教授に外国人講師として集中講義（西洋史）が委嘱され、また十月にはパリ大学ソブール教授の講演研究会（西洋史）が行われ、翌六八年三月には、西ドイツ・フランクフルト大学のフェッチャー教授、ベルリン自由大学のレンメルト教授の講演会（独文学）が開かれた。

四　大学紛争と改革問題（一九六九～一九七四）

文学部の封鎖　一九六九年（昭和四四）四月十日のいわゆるクラス反戦連合による入学式妨害によって、前年来全国各大学で続発していた学園紛争は北大にも飛び火した。七月ごろまでの文学部では、所属の教養課程担当教官は教養部において学生との対応に辛酸をなめていた一方、専門課程では比較的平静に授業が続けられていた。

しかし、その文学部も、教養部の授業再開のために教室を貸与しようとしていたのをきっかけに、八月十七日いわゆる五派連合に属すると思われる学生によって文系四学部校舎が封鎖されるに及んで、否応なしに紛争の渦中に投ぜられることになった。すなわち、この日昼ごろ本部前で集会を開いた武装学生集団は街頭デモの後学内に帰り、午後四時五分ごろ教育・文・法・経済四学部に突入し、バリケードを構築、午後七時過ぎには四学部の研究棟、管理棟及び四学部共同の講義棟の占拠・封鎖を完了した。文学部ではただちに教職員を招集し、緊急教授会を開いて対策を講ずる

とともに、四学部の連絡委員を通じて意見の統一を図ることとした。また部局長連絡会議、学長と四学部長の協議などを通じて種々の解決策が検討された。文学部としては、とりあえず、紛争発生以来置かれていた緊急対策委員を増員し、学長の要請を受けて授業計画の検討を第四委員会に付託し、また封鎖に対する抗議の意志表明として文学部声明を考慮するなどの方策がとられた。事務部は、いったん学生部中会議室に仮事務室を設け、続いて、北一五条西五丁目幌北消防署横の附属病院旧看護婦寄宿舎に移転して業務を続行。また文学部学生のための控室として、クラーク会館の大集会室（法・経・教と共通）及び小・中会議室の利用を確保した。八月二十九日には、一般教育教授会の同意を得られないまま「教授会声明（シニア）」が発表され、九月二日には「学生諸君へ」と題する文学部長からの通知を「声明」に添えて学生全員に送付して、全学部の意志を結集するため登校を促した。「声明」は次のとおりである。



封鎖ついに文学部へ拡大

声　明

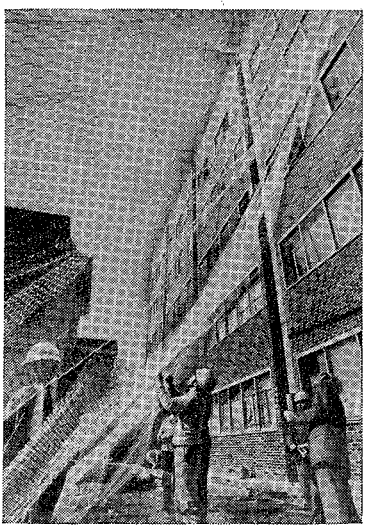
われわれは、現在文学部校舎が封鎖され教育・研究がはなはだしく阻害されているこの事態に、管理運営の任にあたる者として責任を痛感し、解決に全力をあげる覚悟である。

われわれは、この封鎖の行為を不当なものと認めざるを得ず、封鎖参加者に対して即刻の解除を要求する。われわれは、全学部討論集会をはじめ、さまざまな形の討論の場を積極的に設けること等を通じて、問題の解決をはかる決意である。

なお、われわれは、現在学部ひいては大学内に、抜本的解決を要する諸問題のあることを認め事態の如何にかかわらず大学の体質、制度の改革に努力を傾注することを表明する。

昭和四十四年八月二十九日

文学部教授会（シニア）



自衛する法文系校舎

会議室を失った教授会は、その後、応電研講義室、八重州ホテル、クラーク会館、低温研講義室、札幌会館、薬学部講義室、工学部会議室、理学部会議室などにそのつど場所を求めて、八月五回、九月六回と精力的に会議を重ね、問題の解決と授業の再開に全力を傾けた。九月十二日には、当面する非常事態に対応するため臨時で新規の委員会を設置することを決め、臨時運営委員会（任務―緊急対策）、学生委員会（学生問題対策）、教務委員会（教務関係対策）が置かれ、以後これらの委員会が学部長を補佐して、事態の一応の解決まで活動を続けた。

臨時運営委員会は他の委員会との連絡調整に当たりつつ対策を立案・計画し、また学部内の情報連絡を任務として各層への説明会の実施、文学部広報の発行などに努めた。教務委員会は、封鎖直後から授業計画の立案に腐心したが、確保しうる教室の不足、教養部からの移行時期の遅れ等々の悪条件に悩まされながらも、第一号、第二号と臨時授業時間割を作成し、また卒業論文の提出期限を翌年一月まで延期するなどの緊急措置を考慮した。この間、各専攻課程を中心に研究会、学習会などがともかくも行われていたが、九月三十日には、旧工業教員養成所の工学部教室数室も借用できる目途が立ち、臨時時間割による授業が実施された。一方、学生委員会は、文学部学生自治会、文学研究科院生協議会、封鎖学生らからの団体交渉や大衆団交の要求に対する対応に追われたが、教授会はこれらの要求に対して、教授会自体は団交の当事者ではあり得ないが、準公認団体と文学部長との間の取決めの可能性を含む話し合いには応ずるという立場を貫き、学生委員会はこの原則に従って自治会との話し合いの予備折衝、院協との団交権

をめぐる交渉、封鎖派学生との討論集会の予備交渉などに奔走した。さらに文学部助手院生共闘会議や助手会メンバーからも団体交渉や懇談会開催の要求があり、運営委員会がこれと対応した。九月二十六日には、こうした教授会の態度を不満とする封鎖学生らが札幌会館で行われていた教授会に乱入し、教官らに占拠中の文学部会議室への同行を求めるという事件もあった。

封鎖解除と授業再開　このような経過をたどるうち、十月三十日、文系四学部連絡会議に参加した一部教職員学生によって、文系四学部校舎の封鎖が解除されるという事態が発生した。その際、激しい内ゲバが起こり、一〇〇名を超す負傷者が出る不幸な事態となったが、激突の舞台となった文学部校舎も投石放水などによる被害で荒廃した姿をさらした。文学部ではただちに教授会を開いて今後の校舎の管理運営方法を協議したが、十一月一日に他学部と同様校舎に防護用の金網をかぶせ、各専攻課程ごとに被害状況の調査を始めるとともに、十一月五日、文学部長声明を発表して、学部の正常化への努力を表明した。

声　明

われわれは、文学部校舎の封鎖以来、これを不当とする立場を堅持し、理性的解決を求めて解除要求をはじめ事態の解決に努力を重ねてきた。しかし、このわれわれの努力は決して充分であったとはいえず、われわれが深く反省しているところである。

十月三十日の文学部校舎の封鎖解除は、その意図の如何にかかわらず、力に対するに力をもってしたという面もあり、結果として多数の負傷者を出すに至ったことは、われわれの極めて遺憾とするところである。

われわれは流血の惨を絶対避けることと、研究教育施設のこれ以上の荒廃を防止することを当面の方針とし、今後学部機能の一日も早い正常化に努力する考えである。

昭和四十四年十一月五日

文学部長

続いて十一月八日には、評議会の決定に基づき機動隊による本部・教養部・図書館等全学の封鎖解除、強制捜査が行われ、以後機動隊の駐留が続く中で、文学部では教官の宿日直体制をとり、学部復旧委員会を設置して荒廃した校舎の復旧計画を立て、十一月二十日には文学部本校舎での事務を再開、二十二日には「授業についての連絡」を全学生へ送付、十一月二十七日、四月以来の時間割による全授業を四カ月ぶりに文学部教室で実施、十二月二日付けで「文学部校舎での授業開始にあたって」と題する文学部長の所信を表明した。

十二月に入ると受講する学生も漸増して、教務委員会は単位取得に必要な授業時間数を計算しつつ後期時間割、補講時間割を作成、冬季休業を十二月二十八日から一月五日までに短縮、卒業論文・修士論文の提出期限を延期するなどの措置をとった。しかし、いわゆるなしくずし的授業再開に反対する自治会・院協の説明会開催の要求や、「文闘委」、助手院生共闘などからの封鎖をめぐる討論集会の要求も強く、文学部ではこれに対して全学生・院生を対象とした文学部主催の説明会を十二月十一日クラーク会館で開催し、授業再開の経過及び方針を説明した。

このようにして、一九七〇年に入って事態はようやく正常化へと向かい、各委員会は三月までなお活動を続けたが、一月には教官による当直制も廃止されて、さしもに激烈をきわめた紛争も表面的には沈静化していった。しかし、教養部からの二年目学生の移行が遅れたため、文学部でも移行受入委員会を作って対策を検討、学部進学に当たって特別緊急措置をとることを決定、四月四日にようやく移行学生の専攻課程が決定した後、本来教養部で取得すべき語学の授業や二年目後期の概論等の単位を、六月までに取得しうるように配慮するなど、授業計画の上ではなお影響が残った。また文学部庁舎封鎖の事態も、その後、一九七一年(昭和四六)十一月、一九七二年二月、十月、一九七六年一月と、種々な学生グループによってさまざまな名目でひき起こされ、そのうち一九七二年には文学部長事務取扱が不法拘禁される事件があり、時には警察力の導入による封鎖解除をやむなくされるなど、紛争の余波はなお長

く文学部をゆさぶり続けた。また、一九七二年十月二十三日には、附属北方文化研究施設で陳列ケースが何者かによって爆破されるなど、不穏な事態も発生した。

学部長選挙問題

一方、封鎖を頂点とするこの紛争は、一般的には一九六〇年代後半に入って全国的に顕在化してきた大学改革問題、また特殊には文学部教授会（シニア）声明が認めているような「抜本的解決を要する諸問題」を文学部教授会につきつける契機となった。大学解体を叫ぶ封鎖派学生は別としても、教授会自治に代わる全学部構成員による自治を要求する学生自治会や院生協議会、身分の明確化を中心に学部改革姿勢の確立を教授会に求める助手層、前述の教授会声明（シニア）に対して同調を拒否したことに象徴的に現れている教養課程担当教官の不満――これら学部を構成する各層との間の亀裂が、紛争を通じて各層との対応の中にしだいにあらわになり、事態の解決のために避けられぬ問題として教授会に提起されてきたのである。

学部長選挙問題は、このような文学部に内在する矛盾が集中的に噴き出したものとみてよいであろう。一般的にこの時期、一九六九年（昭和四四）後半から学部長選挙問題は、文学部のみならず全学において大きな争点となっていた。一方には助手、職員、学生の参加を求める声があり、他方には一九六九年学生参加を認めた教育学部の学部長選挙規程が文部省の同意を得られず学部長事務取扱を置かざるを得なかった現実があり、一九六〇年代後半から任期満了、あるいは辞任した学部長の後任は正規の手続きによる補充が難航し、一時は全学の学部長のかなりの数が事務取扱などで占められたこともあった。それに加えて文学部の学部長選挙問題をいっそう複雑にしたのは、シニア（専門課程）教授会、ジュニア（教養課程）教授会を含めて四つの教授会をもつことに現れている文学部特有の機構と、それを代表する文学部長職の複雑な性格である。

新制大学発足以来、文学部教官の過半数を占める教官が教養課程を担当することによって文学部は、全学による教

養課程支援といういわゆる北大方式を実質的に担ってきた。しかし、専門課程・教養課程に関する教育責任はそれぞれ職能別に区別されており、この機能に関して学部はひとつとはいえない。これらの教養課程担当教官が所属するのは実際上教育組織としての文学部ではなく、研究組織としての文学部である。文学部長が主宰する教養課程関係の教授会は、教養課程に関して人事・予算・教育を審議決定することになっているが、教育上の諸問題は実質的には法制化されていない教養部の教官会議で検討され、文学部長は教官人事を介して間接的に教養課程とのかかわりをもつにすぎず、また教育上の諸条件をめぐる問題も文学部教授会の審議の対象外におかれている。このような文学部の構成と学部長職の多義的な性格、さらに根本的には北大独特の運営方式に由来する研究条件その他の面での学部内格差の問題、これらの要因が教養課程担当教官、とりわけ教授会構成員以外の教官層にとって、学部長に代表される学部の運営に対する関心を消極的なものにしたのはやむをえないことであった。

一九六九年十一月二十八日、紛争の最中、野田寿雄文学部長の任期満了を控えて行われた文学部長候補者選挙は、投票数が規定数に達せず不成立に終わり、再投票も中止されて、十二月十二日の「教授のみの教授会」は学部長事務取扱を置くことを決定し、小栗浩教授を候補者に選出した。以後、一九七四年四月一日梅岡義貴が文学部長に就任するまで四年余の間、正規の学部長を欠いた時代が続くことになる。この間、小栗をはじめ、一九七一年八月一日就任の鳥山成人、一九七三年四月一日就任の梅岡義貴と、歴代の学部長事務取扱は、正規の学部長選出を文学部の当面する最重要の課題と考え、学部長選挙の実施のために努力を傾注した。

改革への動き

小栗学部長事務取扱は一九七〇年(昭和四五)一月就任直後の教授会において、学部の当面する諸問題の解決と今後の改革を要する問題点の検討を基本方針とする旨を表明。同年一月二十八日付けの『北大広報』二〇号では「大学改革に関する各学部の現況」の文学部の項で、前年七月に設けられた「文学部運営

に関する計画委員会」が学生参加の方式、教授会の責任体制の確立、教育・研究体制の改革に関する問題点を指摘した答申を提出したこと、十一月、大学改革に関する制度調査班が設置されたこと、当面の方針として学部長選出方法の検討と、専門課程・教養課程問題について可能な範囲での具体的解決策の発見に努力することが述べられている。以後、この方針に添っていくつかの施策が実施された。

制度調査班は大学改革に関する文献・資料の蒐集と学部構成員からの制度改革に関する意見聴取を行って任務を果たし、専門課程・教養課程の関連については、講義・演習の相互交流を促進するために、文学部教官相互の講義委嘱の手続きを簡略化する内規改正を行い（一九七〇年一月）、大学院文学研究科委員会の構成について、継続的担当者への委員委嘱と年度ごとの担当者の選考方法が決定された（一九七一年三月）。また学生から要望の強かった専門課程のカリキュラム改革に関しては、教職科目を含む他学部授業の単位認定、学芸員資格取得単位の設定などの小改正が行われたほか、全般的検討が第四委員会（教務関係）に付託され、後に、いわゆる「単位互換制」の趣旨に添った文学部・文学研究科の規程改正が行われて、他大学及び外国の大学において修得した単位が文学部において修得単位として認定されることになった（一九七四年四月施行）。

しかし、小栗学部長事務取扱は、このような学部改革の方策をさらに長期的な展望に立って実施するためにも、学部長事務取扱の立場には限界があり、正規の学部長を選出することが必要であり、またそれは学部自治の根幹であるという立場から、学部長選挙規定の改正を急ぎ、一九七〇年七月から翌年四月にかけて、各種教授会に改正案を諮った上、一九七一年五月内規改正が決定された。従来、学部長選挙規定に関しては、被選挙権及び選挙権者の範囲、決定の手続きなどについて繰り返し議論があり、改正を重ねてきたが、有権者の範囲についてみれば、一九五〇年制定時の教授・助教授から、一九五五年講師、一九五八年助手としだいに拡大されてきた。今回の改正は、これらの有権

者全体の意志を最終投票まで反映させようという趣旨のものであった。しかし、同年六月から七月にかけて行われた学部長選挙は再度不成立に終わった。内規改正の手続きに対する不満、学部改革への展望よりも学部長選挙自体に重点をおいたことへの批判がその原因であると推測された。

その後を受けた鳥山、梅岡両学部長事務取扱も引き続きこれらの課題に取り組み、とりわけ学部長選挙の実現に向けて教授会構成員の協力を要請した。一九七一年七月には「学部長選挙の問題点に関する検討委員会」が設置され、十月報告書を提出。一九七三年四月には「学部長選挙準備委員会」が設けられて、検討・協議を重ねた結果、七月に中間答申を行い、これに基づいてさらに有権者各層との懇談を重ね、同年十一月「学部長候補者選挙実現の諸条件について」と題する答申を梅岡学部長事務取扱に提出した。同月の教授会でこの答申について報告と説明が行われ、続いて十二月学部長選挙実施に向けて教授会で趣旨説明があり、一九七四年二月、懸案の学部長候補者選挙が実施されて、梅岡教授が候補者として選出、決定され、四月一日付けで文学部長として発令、四年半ぶりに正規の学部長が実現した。

このような文学部自体の動きと並行して、大学改革問題に関する全学的な調査検討の進展にも、文学部は対応を続けた。一九七〇年二月、評議会のもとに北海道大学改革調査専門委員会が発足し、九月に「北海道大学改革調査報告」がまとめられたのに応じて、文学部改革案検討委員会を設け、一九七一年二月これに対する意見書を提出したのを皮切りに、続いて設けられた北海道大学改革検討委員会など各種の委員会、専門委員会に委員を出すとともに、その報告に対して教授会ないし懇談会で検討を加え、あるいは検討委員会を設置して学部の意見書を作成する一方、中教審答申や国立大学協会、文部省からの改革についての照会に対しても文学部としての見解がまとめられた。

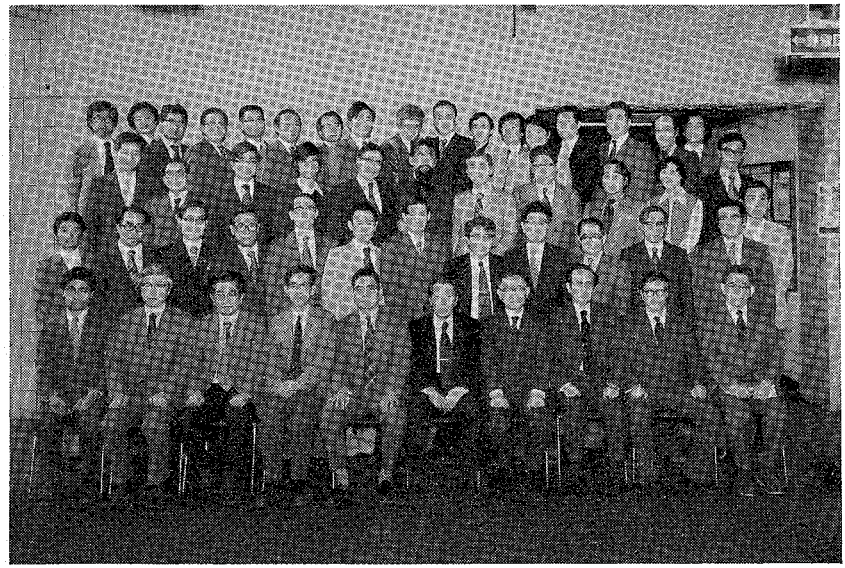
また、紛争以来とくに教授会メンバー以外の教官層から出されていた学部の方針や決定事項に関する情報の不足に

ついての不満に対処するため、本学部教官を対象とする広報『文学部ニュース』の刊行が計画され、一九七三年八月一日付けでその第一号が発刊されて以来、不定期ではあるが継続的に刊行されて、学部内の意志疎通に役だっている。

五　現状と展望

正規の学部長の選出は、文学部の一応の正常化を意味した。学部改革問題も一時の切迫した雰囲気は薄れ、専門課程・教養課程問題も学部内のいわゆるシニア・ジュニア問題の枠組を離れ、当然のことながら教養課程の問題は全学的な検討へと委ねられていった。すでに一九七一年（昭和四六）十二月に北海道大学改革検討委員会が「教養改革についての問題点」を指摘したのを始めとして、同委員会の第二―一専門委員会、教養部審議会、一九七四年三月に設置された一般教育特別委員会、教養課程特別委員などによる検討を経て、いわゆる北大方式そのものの再検討が行われ、教養課程・専門課程を一貫した教育の構想が追求されていく。文学部からももちろんそれぞれ関係の委員が選出され、審議の中心的役割を担っているが、とりわけ全学の教養課程担当専任教官の約半数を占める教官を抱える文学部としては、さらに学部全体としてのこの問題へのかかわり方が今後問われてくるであろう。一方、全構成員による自治を目標として改革を激しく迫った学生自治会、院生協議会などとの接触も、紛争後は減少の傾向をたどり、学生たちの要求は主としてカリキュラムの改革、研究室・研究費など研究勉学条件の改善に向けられるようになった。

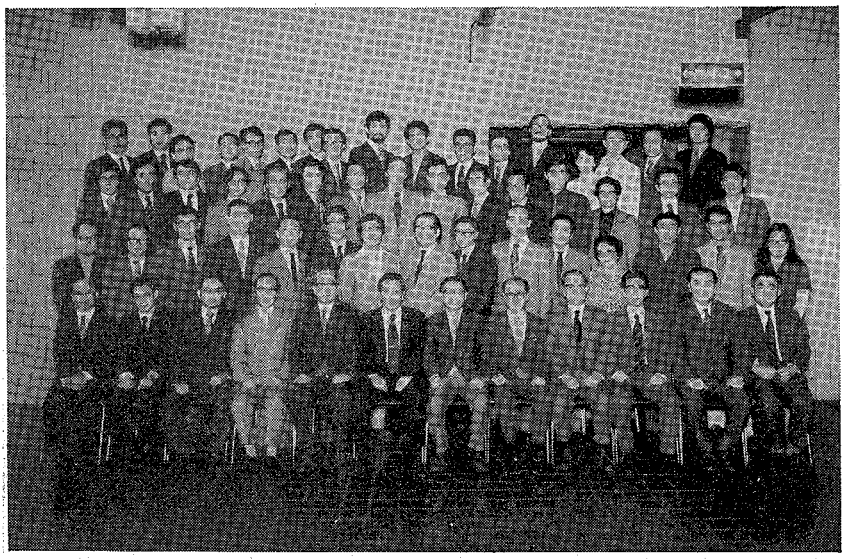
このようにして、なお改革の大きな底流を内に秘めながらも、文学部は表面上は紛争以前の拡充・充実の道を再び



専門課程・研究施設関係教官（1978年5月19日現在）

歩み続けているようにみえる。

まず、講座・学科目などの増設についてみれば、一九七三年四月十二日付けで附属北方文化研究施設に文化人類学部門が増設されたほか、一九七四年四月には従来教養課程の事実上の授業科目であったロシア語が法制上の「学科目」として新設された。北方文化研究施設はこれに伴い庁舎の新営計画の立案を始めるとともに、一九七四年十二月には、斜里町を通じ同町郷土研究会から北方文化研究施設に対し、オホーツク文化研究調査を目的とする研究室建設敷地として、斜里町内の土地六六一平方メートルの寄付申し出があり、文学部はこれを受け入れることに決定。一九七六年三月には同地に同研究施設斜里分室（一二五平方メートル）が建設され、五月二十四日学部長、施設長が出席して落成式が行われた。また、一九七三年から本学に大学院環境科学研究科の新設が計画され、文学部からは社会学講座の関清秀教授がその検討委員会委員に選出されたが、同教授はその後も同研究科の新設のために尽力、一九七七年四月、同研究科は関教授

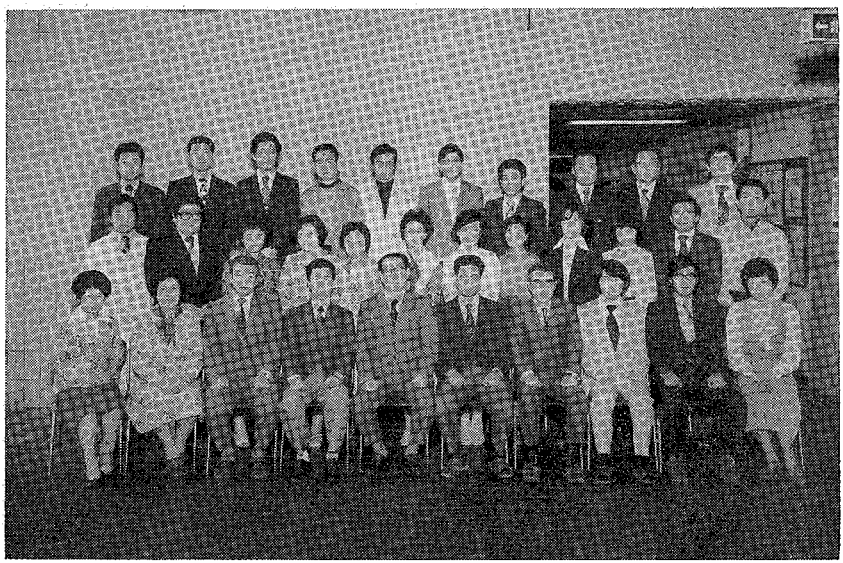


教養課程関係教官（1978年5月19日現在）

を研究科長として発足した。

文学部の蔵書数は一九七四年三月現在一八万九〇九四冊に達し、その保管、使用管理のあり方が、研究室の狭隘化とともに問題になってきたが、附属図書館の整備が進むにつれて、この問題について図書館との間に協議が行われ、一九七四年四月、一九七三年度までに購入した図書館書庫内配架の文学部所属図書については図書館へ管理換えし、管理換え後の図書の利用については文学部でいわゆる第二次保管を行うという方針が決定され、これに基づいて文学部では学部所属図書利用要項を検討したが、さらに一九七五年には、文学部図書の当面の問題及び将来構想を検討するため「文学部図書のあり方等検討委員会」が設置されて、同年十月答申を提出。一九七七年二月には文学部の図書を附属図書館へ全面管理換えする基本方針が教授会で了承された。

国際交流は、一九七四年から日本学術振興会招へい外国人研究員の受け入れが行われるようになり、同年三月アルゼンチン・ブエノスアイレス大学のギラオ教授らの



文学部事務職員（1978年5月19日現在）

受け入れが決定されたのを始めとして、以後毎年数名の外国人学者が文学部で研究指導を行っているほか、国際交流基金による客員教授の受け入れも行われている。

一九七五年四月一日、梅岡学部長の病気辞任に伴い、塩谷饒が文学部長に選出されたが、同年九月二十日には、文学部が法文学部から分離独立して二五年を迎えるのを記念して、文学部創立二十五周年記念式典が挙行され、一〇一番教室において学内外関係者、文学部旧・現教職員、卒業生、在学生ら約一〇〇名が参列して記念式が行われた後、祝賀会、さらに午後にはクラーク会館において、野田寿雄、本堂正夫両教授の記念講演会が開催された。なおこれに関連して、また本学創基百周年を機に各学部の同窓会整備の動きにも触発されて、長い間活動を中断していた文学部同窓会の再発足を望む声が強まり、一九七四年後半から懇談会などを開いて準備した結果、文学部二十五周年記念式典当日、復活第一回の同窓会が開かれ、また新たに『同窓会報』が発行されるとともに（一九七五年九月）同窓会員名簿が作成された（一

九七六年九月)。

また、一九七五年六月には一般法令様式に倣うという趣旨で文学部内規の整理が試みられたほか、翌一九七六年三月には「文学部委員および委員会に関する規定」が、学部の実情に即して一部改正され、名称も「文学部委員及び委員会に関する内規」と改められるなど、規程の整備が相次いで行われた。

一九七七年四月、塩谷饒が文学部長に再選されたが、同月十八日には文学部に新たに行動科学科が設置された。旧哲学科Ⅱを母体として哲学科から独立改組されたもので、初年度は実験心理学第一、第二講座、社会学講座がそれぞれ認知情報学講座、比較行動学講座、社会行動学講座へと振り替えられ、年次計画で次年度以降、数理行動学、動態社会学、社会生態学、社会心理学の四講座の開設が予定され、それに伴って、実験心理学と社会学の二専攻課程(学生定員二五名)が基礎行動学、比較行動学の二専攻課程(定員五〇名)に変わることになった。完成時には、文学部は哲学科七講座、史学科六講座、文学科九講座、行動科学科七講座の構成(定員一六五名)となり、一九六六年に作成された第四学科新設の十年計画案の実現にあと一歩と迫ることとなる。なお、行動科学科設置に伴い文学部建物の増築計画が一九七七年二月以来推進され、一九七八年十一月に竣工した(一三二・七平方メートル)。

こうした改組拡充と並行して、人事の促進も活発に行われ、一九七八年四月現在で文学部所属の教官数は、専門課程七〇名、教養課程八五名に達し、教官不足が嘆かれた一九六〇年代初めに比べて、その充実は著しいものがある。

一九七九年からの入学試験実施方法の変更が北大の教養課程のあり方に及ぼす影響、現在検討されている教養部独立新機構化案など、北大改革ひいては文学部改革の動きの帰趨はまだ予断を許さないが、これら充実したスタッフによる研究教育は、研究の学際化などの変化に即応しつつますますその実をあげており、文学部は創立以来二八年を経て形式内容ともにいちじるしく整備され、さらに将来へ向けて大きく羽ばたこうとしているといえよう。

第二部　人と研究

はじめに

文学部は学科おのおのというよりも、その中に含まれている専攻課程がそれぞれ独立の存在として活動しているのが特徴であって、各専攻課程がそれぞれ一つの学科に相当するほどの研究領域や業績をもっている。この状況を踏まえて、各専攻課程から提出された資料をもとに、文学部の人と研究の歴史をまとめてみた。

一　哲学科Ⅰ

西洋哲学

当初、哲学第一、第四、第五講座として設けられたのが現在の西洋哲学第一、第二、第三講座の前身である。その後大学院文学研究科の設置、課程の整備に伴って、それぞれ現代、古代・中世、近世哲学の専門領域に分かれて哲学の教育・研究に従事する博士講座になっている。

創設者は、初代法文学部長、文学部長でもあった伊藤吉之助で、万事思うに任せぬ困難な諸条件下にどうやら一九四八年（昭和二三）秋までには形をなすところまでこぎつけることができた。草創期のスタッフは、旧第一講座〔現代〕伊藤吉之助教授（一九四七年六月～一九五一年七月）、細谷貞雄助教授（一九四八年三月～一九六〇年三月東北大へ転出）、

旧第四講座〔古代・中世〕武田信一教授（一九四七年七月～一九五九年六月中央大へ転出）、斎藤信治助教授（一九四七年七月～一九五二年十二月神戸大へ転出）、旧第五講座〔近世〕斎藤忍随助教授（一九四八年七月～一九五三年三月東大へ転出）であった。当時学生であったもののなかには、武田から古典学への関心を学んだ池田英三（現在本学部言語学講座助教授）、斎藤（忍）からギリシア哲学への入門を授けられた水野一（現在本学部哲学助教授）、ドイツ哲学専門の細谷から薫陶を受けた奥山次良（現在本学部社会思想史教授）らがいる。

東京帝国大学教授（哲学・哲学史講座担任）としてわが国の権威ある哲学辞典を編さんし、徹底した個人本位の考え方と厳格な授業によって知られる創設者伊藤は、発足に当たって文学部内における哲学の重視と哲学専攻内における論理の尊重という基本方針を堅持した。本学の一般教育課程の授業科目に初めから論理学があり、その反面今に至るも倫理学がないのは、そのためである。学生に対してのみならず同僚に対してもきわめて厳格であった伊藤は、しかしその反面、退官後在職した中央大学文学部に、みずから創設して間もない本学からの転出者斎藤（信）、武田を迎え入れる寛容さをも併せ備えていた。これらの三名はいずれも今は亡き人々である。

草創期の末、法文学部から文学部への独立、学科設置に伴う拡充のため、論理学、哲学担当として花田圭介講師（一九五〇年十一月、その後一九五三年二月助教授）、岩崎允胤講師（一九五一年五月、その後一九五三年二月助教授）がスタッフに加わった。しかし、前記斎藤（信）、斎藤（忍）の予期せぬ転出のために、花田は新第三講座〔近世〕を担任、岩崎は武田信一担任の新第二講座〔古代・中世〕に所属換えになったにとどまり、ここにいわば第二の草創期が繰り返し始められることになった。学部全体の困難な時期に武田は病身のうえ学部長の激職に追われ、そのため大学院の専攻を含め専修科の運営と教育は古参助教授の細谷を中心に実施された。当時在籍した学部生、院生はやや数を増していたが、榎木益栄（現在北海学園大教授）、橋本剛（同）、八木橋貢（現在本学部社会思想史助教授）らは、いずれも細谷

の重厚かつ繊細な指導を受けた人々である。当時花田圭介から記号論理学の手ほどきを受けた吉田夏彦（現在東工大教授）、同じくフランス哲学への関心をさそわれた加藤精司（現在道立札医大助教授）、また中世哲学専門の武田の衣鉢を継ぎ、岩崎の指導を受けた大出哲（現在室蘭工大教授）もこの期に属する。

前記一九五九年六月の武田の辞職、翌一九六〇年三月の細谷の転出は、創設後十二、三年足らずで否応なく、第二期への移行を促した。西哲第一講座には急きょ倫理学講座からの配置換えによって茅野良男助教授（一九六〇年四月）が細谷の後任となり、やがて伊藤勝彦助教授（一九六三年四月～一九七一年三月埼玉大へ転出）に助けられ、西哲第二講座は岩崎が担任し、やがて中村一彦助教授（一九六五年四月～）に助けられ、西哲第三講座は引き続き花田が担任し、やがて花崎皋平講師（一九六四年四月講師、一九六六年四月助教授～一九七一年十一月退職）に助けられ、講座担任者の教授昇任（花田、茅野は一九六六年十二月、岩崎は一九六八年一月）も実現されるに及んで、ここに創設以来今日まで最も形の整った時期を迎えた。しかし、時の経過とともに、再び一九六八年四月には茅野がお茶の水大に転出し、一九七三年四月には岩崎も一橋大に転出した。年ごとに増加した在籍学生、院生の中から特定の数名をあげることは、もはや差し控えねばならないが、平明かつ丹念な現代ドイツ哲学の解説によって茅野が多数の後進を教導し、ソ連の自然科学哲学の成果を援用することによって岩崎がギリシア哲学の教育に革新の気を吹き込み、ベイコンに関するルネサンス哲学史研究によって花田（一九六八年～、ツール大学ルネサンス研、研究員）が後の国際交流の緒を開いたのは、この時期のことである。

茅野転出後の西哲第一講座は、一九六九年（昭和四四）四月からドイツ現象学専門の熊谷直男教授によって担任され、一九七二年四月には現代論理学研究者の藤本隆志助教授によって補充され一新された。岩崎転出後の西哲第二講座は、一九七六年七月教授に昇進したギリシア哲学専門の中村によって担任され、古文書学研究への広がりを示して

いる。西哲第三講座は、「大学闘争」後の花崎辞職の痛手を負いながらも、草創期以来の花田によって一貫して担任され、近年ますます国際化の傾向を強め、今日に至っている。第二期以降、特に近年は、各講座の自治の原則によって専攻が運営されているところに、よきにつけあしきにつけ、西洋哲学の最大の特色がある。

中国哲学　中国哲学講座は、学部のみならず、大学院の博士課程にわたって、古代より現代に及ぶ中国の哲学思想のみならず、古代中国の文字や古典を扱い、研究し教育することを目的とする。本講座は法文学部発足の時点において第二講座として活動を開始した。一九四八年（昭和二三）四月三十日、竹内照夫が旧制第五高等学校より助教授として迎えられ、一九五一年七月二十日、教授に昇任した。春秋左氏伝や礼記の研究を主体として、中国哲学史の大きな流れをおさえ、その広く深い学殖と柔軟な研究態度は今日の中国哲学研究室の気風を作りだした。一九六四年、職を辞して静岡市に住居を定め、関西大学その他の大学の教授として活躍している。その後をうけたのは一九四九年以来助教授であった佐藤一郎で一九六四年十一月教授となり今日に至っている。論語の研究によって中国思想の原点をさぐり、さらに古代より中世に至る哲学史の研究、特に中国への仏教の渡来による中国固有の思想の変容、さらに仏教の変容の諸問題を研究することによって中国思想の本質をさぐろうとしている。

一九六五年より一九七二年まで助教授として佐藤震二が近代の思想を研究教授したが、九州大学文学部に転ずると間もなく病気で急逝した。その後任の伊東倫厚は東大助手から一九七四年に来札し今日に及んでいる。孟子・礼記などを研究し、広く戦国から漢代に至る寓話などの思想史的研究、さらに古典の索引の作製など精力的に活躍している。なお、教養部関係では戦前より樽本成美教授が漢文講読を担当し中国哲学の基礎訓練をしていた（一九五七年定年退職）。現在では一九六二年から一九七二年まで中国哲学講座の助手であった松川健二が助教授として漢文講読を担当している。研究分野は明代の思想で、現代中国語の文献によって専攻学生の訓練を行っている。

研究活動は北海道中国哲学会から、一九六一年発刊以来『中国哲学』を六号まで研究発表誌として発行し、さらに『資料専刊』として不定期に翻訳や索引を単行本形式で学界におくっている。

印度哲学　印度哲学専攻は、インドにおいて成立・展開した哲学・宗教の研究を中心とするが、特に仏教学については、インド仏教の発展的形態としての中国・日本の仏教の研究も行っている。講座が開設された一九四九年（昭和二四）に、北海道仏教会から、仏教学研究のために「印度哲学講座充実資金」が寄付され、爾後約一〇年間、この資金によって仏教学の講師（非常勤）を招聘し、また関係図書を購入した（これは「アソカ文庫」と名づけられた）。

初代教授の坂井尚夫は、一九四九年秋に着任したが、一九五五年十一月、四九歳をもって本学附属病院で死去した。インド哲学の源泉であるベーダ・ウパニシャッドの思想研究の権威であったが、生前の業績を記念して、一九五六年四月に『インドの宗教』が刊行され、蔵書が文学部に収められた（これは「坂井文庫」と名づけられた）。

一九五〇年四月に着任した助教授平川彰は、インド仏教を専門としたが、一九五四年四月に東大に転出した。戒律をはじめ原始仏教や大乗仏教に関して大きな業績がある（現在、東大名誉教授、早稲田大学教授）。

一九五三年、大学院東洋哲学専攻（甲印度哲学、乙中国哲学）が設置され、大学院充実のために、中国・日本の仏教を専門とする古田紹欽が専任講師として着任した。ついで一九五四年四月、藤田宏達が助手で着任、翌一九五五年七月に助教授になった。

故坂井教授のあとには、一九五六年四月、東大教授中村元が併任教授となり、一年間在任した。インド哲学、仏教学、比較思想などの広い分野で優れた業績をあげ、世界的な学者として知られている（現在、東大名誉教授、東方学院院長、文化勲章受章者）。

一九五七年四月、古田講師が教授の任に就き、一九六四年四月、日本大学に移るまで、講座の充実・発展のために尽力した。鈴木大拙博士の高弟で禅研究の大家であり、多くの業績がある。在任中は、単身赴任し、その独自な学風と人柄で、大きな影響を残した（現在、日本大学教授、鎌倉松ケ岡文庫理事長）。

古田教授の転任後、一九六六年十月、今西順吉が専任講師として着任し、一九六八年十月に助教授になった。また、藤田が一九六八年十二月に教授になり、ともに現在に及んでいる。藤田の専門はインド仏教で、一九六〇年七月から二年間、ハーバード大学に留学し、学位論文『原始浄土思想の研究』によって、一九七一年度の日本学士院賞を受賞した。今西助教授の専門は、サーンキャ・ヨーガなどインド哲学一般で、ゲッティンゲン大学留学時代から手がけてきた仏教論書の研究を西ドイツで出版するなど着実な業績をあげている。

倫理学

法文学部創立とともに、哲学第六講座として設置されたのが現在の倫理学講座であって、爾来一講座一専攻課程として倫理学を専攻する学生の教育・指導に当たり、今日に至っている。初代の講座構成メンバーは、須田豊太郎教授（一九四七年五月～一九六六年三月）・斎藤忍随助教授（一九四八年七月～一九五四年三月・現成城大学教授）・広瀬京一郎助手（一九四七年九月～一九五〇年一〇月・現お茶の水女子大学教授）であった。

須田教授は法文学部創設以前にすでに北大の本部に着任、法文学部創設委員として、時の伊藤誠哉学長や伊藤吉之助初代学部長を補佐し、学部の創立と整備に尽力した。その後も評議員・学部長を歴任して学部の運営に当たり、定年退官後名誉教授の称号を受け、専修大学教授となり、同大学の人文科学科大学院の新設に再度尽力した。専修大学在任中、一九七四年（昭和四九）十月七日、札幌在住の知人に結婚式の来賓として招かれて在札中に倒れ、長逝した。札幌と北大を愛した同教授にふさわしい最期であった。

斎藤忍随助教授は倫理学講座からいったん西洋哲学の講座に移り、さらに東京大学に転出、両大学でギリシャ哲学

専攻の優秀な学徒を養成し、東大定年退官後成城大学に招かれた。

斎藤転出の後、茅野良男（一九五五年四月～一九六八年三月・現大阪大学教授）が熊本大学から着任、六年間倫理学講座に所属、須田教授とともに指導に当たり、ドイツ観念論の分野における優れた後進を育成したが、西洋哲学第一講座に配置替えとなり、その後任として宇都宮芳明（一九六一年七月～）が東大教養学部助手から講師として着任、須田教授退官後講座担任となり、一九七六年八月以降教授として現在に至っている。なおその間、岩田靖夫（一九六七年四月～一九七三年九月・現東北大学助教授）が成城大学から招かれて六年余の間倫理学講座に助教授として所属、さらにその後任として千葉大学から田中亨英（一九七五年四月～）が着任し、現在講座所属の助教授として活躍中である。

なお倫理学専攻課程を卒業した学生は、第一期以降一九七六年度卒業生まで合わせて三五名であるが、現在各大学・高専において活躍している卒業生に、室蘭工業大学教授石山敬雄、藤女子大学教授近野亘、小樽商科大学教授渡辺裕邦、日本大学助教授小野健知、苫小牧工業高専助教授神英樹、函館工業高専助教授中川清吾、北海学園大学助教授植木幹雄といった多彩なメンバーを数えることができる。小世帯ではあるが、今後も学界のみならず各界に優秀な人材が輩出してほしいというのが、現スタッフの願いである。

宗教学

宗教学講座は、一九四七年（昭和二二）、法文学部が設置されるに当たり、哲学第九講座として、同哲学科の社会学、宗教学専修科乙として発足した。その後、一九五〇年、文学部が独立するに当たり同哲学科宗教学専修科となり、さらに一九五三年、大学院研究科が設置されるに当たり、同研究科の哲学専攻のうちに含まれて今日に至っている。

初代講座担任は、中川秀恭教授（現在国際基督教大学学長）で、一九四七年東北大学より赴任し、一九六七年北海道教育大学学長として転出するまで、二〇年間在職し、新設講座の充実、発展に尽力した。中川の学問研究領域は、西

洋哲学、キリスト教神学、新約聖書学と幅広いものであるが、特に新約聖書学、教文学、中世思想史に関して、この間優れた業績を発表した。

宇野光雄教授は、二代目講座担任で、同講座出身（一九五一年卒業）。研究領域は主として宗教史学の分野で、特に旧約聖書学、イスラエル宗教史の研究を専門としている。土屋博助教授も同講座出身（一九六二年）。専門領域として特に、新約聖書学、キリスト教学の研究に従事している。

同講座出身者のうち、山崎忠（一九五六年）旭川高専教授、渡辺光男（一九六〇年）酪農学園大学講師、岩谷日出夫（一九六二年）東海大学助教授、萩山深良（一九六三年）旭川大学助教授、河野本道（一九六四年）駒沢大学講師、白井暢明（一九六七年）旭川高専助教授、滝沢武人（一九六七年）桃山学院大学講師、菅原正和（一九六八年）岩手大学助教授らは、教育、学問研究において、その他の出身者は、それぞれ、宗教界・教育界・産業界において活躍を続けている。

宗教学の研究領域はきわめて幅広く、一講座の現状において、これらの領域全部を満たし、また学生の要求にこたえることははなはだ困難である。したがって、教育面においては、特に宗教社会学、宗教心理学の領域に重点をおいて非常勤講師を委嘱することによって、欠けている面を補ってきた。今後の課題は、講座増設を図り、研究領域の拡大を実現していくことである。

二　哲学科Ⅱ（一九七七年四月、行動科学科になる）

心理学

法文学部設立とともに哲学第七講座（旧実験心理学第一講座。現行動科学科認知情報学講座）の教授に結城錦一、助教授田中良久（東大名誉教授・一九七七年逝去）が着任した。欠乏時代であったが、東大心理学科並みの合計一六室の実験室、教室、教官研究室を確保し、さらに旧海軍の古い器具を手当たり次第に集め雑品屋の感があった。一九五二年（昭和二七）、実験心理学第二講座（現比較行動学講座）の新設があり、梅岡義貴（現東大教授）、戸田正直（現数理行動学講座教授）が着任した。結城教授は自分と異なる理論的立場にある人材を集めることによって学科の飛躍を図ったと評価されている。彼の専攻は知覚心理学特に音響心理学であったが、応用研究もやった。しかし彼の功績は心理学を初めて実験講座として、一九五六年に全国で一〇講座を実現させるのに力があったこと、さらに日本学術会議会員、日本心理学会理事として活躍したことにある。

梅岡義貴は戸田正直とともに着任すると、北大に動物実験室を開き、比較行動学的研究に着手し、戸田は理論物理学の出身であって、情報科学や数理行動論を心理学に適用し、これはわが国で最も早く、今日の行動科学科の基礎になった。この一九五〇年代後半には、ほかに数理心理学の高田洋一郎、視知覚研究の大山正などがいた。一九六〇年代中ごろ以降になると、結城教授は定年となり、大山正は千葉大に転出したので、研究も梅岡教授の指導下に行動科学的方向一本にまとまった。なお、一九六二年に北大に計算センターができ、コンピューター（中型より大型になる）の利用の体制に心理学研究室は一体となって取り組んだ。その結果、心理学研究体制の近代化という点において、わ

が国でユニークな存在となっている。これは一九七〇年ごろに培養されたのである。

梅岡教授は一九七三年から二年間、文学部長（事務取扱を含む）として学部の正常化に多忙であったが、一九七五年に東京大学に転出し、その後は戸田正直教授が主任となって行動科学研究をまっしぐらに進むこととなり、相場、寺岡の両教授の努力により社会学とともに哲学科から独立して行動科学科の設立を実現し、年次計画で七講座に拡充し、新しく学科の建物も建築されることになった。現在はコンピューターシステム導入以来、年々周辺の器具などを整備し、不断の拡充を行うとともに、ソフトウェアの開発も戸田教授を中心に研究室全体で続けられているが、さらにレベルアップさせるべき大型化したシステムの導入も予定されている。

社会学

法文学部の創設と同時に開設された社会学講座の三〇年にわたる歴史は、一口にいって、初代のスタッフである鈴木栄太郎、関清秀両教授を中心として展開された研究と教育の流れであり、その方法的基礎として共通しているのは社会的事実を実証的に把握する視点である。

わが国における社会学の実証的研究の先達である鈴木博士が北大に赴任して以来、退官する一九五八年（昭和三三）までのおよそ一〇年間は、「都市社会学」の研究が一つの核をなし、教官も学生も一丸となって、鈴木理論の実証に精力的な努力を傾けた。その結晶は『都市社会学原理』（一九五七年）である。

同時期に、現在北大大学院環境科学研究科長関教授は、当時経済学の研究分野とされていた「生活水準」の測定の問題を家族社会学の領域に取り込み、ユニークな「貧困家族」の分析を行って、学界の注目を浴びた。

その後、関教授は家族の研究（『都市の家族』、一九六六年など）の成果を発表するかたわら、「地域社会学」という新しい分野の開拓に着手した。同教授が農村と都市との相互連関に着目したのは、北海道という新しい社会で、根釧パイロット・ファームをはじめ、数多くの地道なフィールド調査を通じて生きた社会そのものを手がけたことが契機

となっている。

今日「地域社会学」という領域は学界で正当な地位を占め、北大社会学の業績が独自性を有しているのも、実証によって裏付けられたものであるからにほかならない。

これらの研究成果はその実証的性格のゆえに実践性、応用性を有している。広義の「社会計画論」は社会学が北大に創設されて以来、講義、演習及び研究のテーマにみられることは特記してよい。そして、関教授の編著『基礎社会学―家族・人口・地域生活の諸相―』（一九七六年）は「社会学と社会計画」の章で締めくくられているが、そこではかかる視点と方向性を具体的に示している。

一九六四年社会思想史の徳永恂が助教授として一般教育から配置換えされたが、一九六八年大阪大学へ去り、同年、代わって三谷鉄夫が助教授となり、北大社会学の伝統を受け継いで現在に至っている。

一九七七年四月、社会学講座は講座名を社会行動学と改め、心理学の二講座とともに行動科学科として再発足した。講座はもとより、その研究内容も、過去の成果を踏まえていっそう充実したものとなるであろう。

これまで社会学を専攻し、卒業したものはおよそ二七〇名に及ぶ。卒業生の多くは全国各地の大学、高校の教職関係をはじめ、官公庁、新聞社、放送局などの報道機関、商社の企画・調査部門など、広範な分野で活躍している。

三 史学科

日本史学

戦後の法文学部創設の際に、日本史学教官の候補として、京城大学にあった末松保和や史料編纂所にあった太田晶二郎の名があげられており、また石母田正の名も新聞紙上に取りざたされている。石母田に着目したのは法学系の創設準備委員だった杉之原舜一のようであり、末松や太田の名があがったのは伊藤吉之助から相談を受けた東大国史学の坂本太郎を介してであろう。これらの候補はいずれも実現に至らず、やはり坂本の推薦によって当時帝国学士院にあった阿部武彦が北大日本史学の草分けとなった。

一九四七年（昭和二二）に赴任した阿部は古代政治史・社会史の専攻で、ついで着任した中世社会経済史の新城常三（一九四九～五六年）、文化史の竹岡勝也（一九五一～五五年）とともに、草創期の研究室作りに力を尽くした。施設も図書も極度に欠乏しているなかでの労苦は察せられるが、当時の研究室は実証を重んじながらも自由で牧歌的な空気があったと思われる。当時は史学系の三専攻はまだ未分化な要素が強く、教官・学生の交流の度合いも大きかった。北大史学会の結成（一九四八年）や雑誌『北大史学』の発刊（一九五一年）はこうした雰囲気を背景としたものである。『北大史学』は資金不足やいわゆる「藤井教授問題」によっていくたびも中絶の危機に瀕しながら、今日まで刊行を維持している。

戦後日本史学の活発な空気が導入されたのは、中世法制史の安田元久（一九五四～六三年）、近代政治史の永井秀夫（一九五六年～）、近世思想史の田原嗣郎（一九五八年～）らが着任した一九五五年前後からであろう。安田は中世法制

史・社会経済史研究の流れを残し、永井は近代政治史研究及び北海道史研究の端緒を開いた。田原は一九六四年には中世文化史専攻の大隅和雄を迎えて北大における日本思想史研究の伝統を開いた。

文学部教官として早くから教養部一般教育の日本史を担当していたのは古代史専攻の北村文治であったが、一九六五年に明治維新史専攻の田中彰を一般教育担当教官に加えた前後から、一般教育担当教官と講座所属教官との協力関係は密接になってきた。北村の跡を継いで一九七一年に着任した古代史の佐伯有清の場合も同様で、田中・佐伯はともに幅広い研究活動で知られているが、学部・大学院を含めた研究・教育活動を助けており、講座所属教官もまた教養部の授業を受け持っている。

阿部はいわゆる「藤井教授問題」の事後処理の任に当たり、文学部長をも勤めたが、一九六九年に北大を去った。阿部のあとに赴任した義江彰夫は若い中世史研究者であったが一九七七年には大隅とともに北大を去ることになる。その跡を継いだのは新進の研究者たち、古代中世史を専攻する河内祥輔と藩政史・幕末史を専攻する井上勝生であり、これが前記の永井・田原とともに現在の日本史学の二つの講座を構成し、田中・佐伯の協力を得て現在の日本史学研究室を運営している。

日本史学専攻の卒業生は、教員・公務員から民間企業まで多方面に及んでいるが、道内諸大学の日本史教育や、道内高校の社会科教育のなかでの活動が目だっており、また開拓記念館や北海道史の編集などで北海道地方史の開拓に努めているものも少なくない。

東洋史学

当研究室は旧史学第四講座と同第一講座（史学概論）の一部とをもって始められ、一九六二年（昭和三七）同第六講座が設置されたのち、旧第一講座は西洋史学に移され、東洋史学第一・第二講座をもって構成されるようになった。第一講座は東アジア史を担当し、第二講座はいわゆる「塞外」史として計画され、現実には西

アジア・南アジア史を担当している。教養部の東洋史担当教官も一九六六年ごろから大学院生の指導に関係し、学部・大学院の授業を兼担しているので、以下併せて記述する。

東アジア史関係は、板野長八（一九四七年四月～五八年五月）、藤井宏（一九四八年六月～六三年五月）、佐久間重男（教養部一九四九年五月～七一年三月）、池田温（一九六四年四月～七一年三月）、武田幸男（一九六八年四月～七一年三月）、菊池英夫（一九七一年九月～）、濱島敦俊（一九七五年四月～）、中井英基（教養部一九七八年四月～）、菊地俊彦（教養部一九七八年八月～）らが、教授または助教授として、研究・教育を担当してきた。

「塞外」史では、北アジア・中央アジア史の分野を護雅夫（一九四八年九月～五六年五月）、本田實信（一九五七年七月～七五年三月）が順次担当したが、本田教授は関心をむしろ西アジア史に集中するようになった。その後、西アジア史は小山皓一郎（教養部一九七二年三月、学部一九七七年四月～）、南アジア史は高畠稔（一九六四年五月～）と分担している。

研究成果としてはのちに板野教授の『中国古代における人間観の展開』（一九七三年）、護助教授の『古代トルコ民族史研究Ⅰ』（一九六七年）などがまとめられたが、単行書の形をとらないものでも、藤井教授の「新安商人の研究」（一九五四年）、佐久間教授の明代の海禁と窯業とに関する研究、池田助教授の中国古文書校訂、本田教授が一九六八年からてがけているイラン中世史蹟の現地踏査の成果などは、学界の貴重な財産である。

研究室の全員に卒業生も参加する研究活動としては、一九六三年夏から「北大東洋史談話会」がほぼ定期的に開かれていて、報告・発表の場となっているが、大学院生・助手層の活動が活発となった一九七三年には卒論・修論要旨を載せた小冊子「研究室だより」が作られ、一九七四年秋からはこれが『史朋』と題する半年刊の「談話会」出版物となって、現在までに七号が出されている。

卒業生は一九七八年三月末現在で九八名（女子一四名）、大学院修士課程修了者二一名を数える。就職先は教員、出

版・報道関係、地方公務員、一般企業など多岐にわたる。学界で研究活動を続けている卒業生は六、七名を数えるが、この数は近い将来さらに大きくなるであろう。

西洋史学

北大の西洋史ははじめ一講座（史学第五講座）と史学第一講座（史学概論）の一部をもって発足したが、一九六二年（昭和三七）に二講座（西洋史学第一・第二講座）になった。新制大学の大学院は一九五三年史学専攻として設けられ、一九五五年西洋史学専攻が置かれた。

西洋史専攻の基礎を据えたのは、戦後日本の学界で西洋中世史研究に大きな足跡を残した故堀米庸三であった。彼は神戸大学予科教授から転じて、発足当初の法文学部で史学第五講座を担任した。彼は戦後の困難な状況の下で学科の創設に当たり、後進の養成とともに、研究文献の蒐集にも力を入れた。彼の下からは何人かの優れた中世史研究者が巣立ち、一九五五年北大が当番校として開催した日本西洋史学会第六回大会は「封建社会における古典荘園の位置と農奴解放をめぐって」を共通論題とし、全国から多数の参加をみた。堀米は一九五六年東京大学に転出し、そのあと中世史は、谷和雄を経て直居淳が担当したが、在職中に病死し、一九六九年から木村豊が担当している。現在一般教育の西洋史を担当している井上泰男と東出功も堀米の衣鉢を継ぐ中世史家であり、また堀米の死後その蔵書の主なものは、故人の遺志により北大附属図書館に収められている。

西洋古代史ははじめ史学第一講座（史学概論）の板倉勝正が担当し、主に専攻の古代オリエント史を講じたが、一九五八年中央大学に転じ、その後古代史の担当者は永らく欠けていたが、一九六八年から古代ギリシア史専攻の岩田拓郎が受け持っている。

西洋近代史ははじめ、史学第五講座分担の鳥山成人が講じたが、鳥山は一九五六年、新設された法学部附属スラブ研究室（のちのスラブ研究施設）に移った。一九五八年から成瀬治が近代史を担当し、一九六八年東京大学へ転出す

る。一九六三年から一九六九年まで在職した遅塚忠躬（現在東京都立大学）も近代史専攻で、この二人の在職時代北大西洋史では、近代国家成立などの問題でいくつかの重要な研究プロジェクトが組まれた。両助教授が相次いで転出した後、一九六九年に、ロシア・東欧史専攻の鳥山がスラブ研究施設（現在のスラブ研究センター）から西洋史に復帰し、また一九七二年、イタリアを中心に近・現代史を専攻する北原敦が迎えられた。

現在北大の西洋史は、堀米以来の西洋中世史研究のほか、古代ギリシア史、ロシア史、社会運動史の分野でも学界で重要な役割を果たしており、学生の卒業論文や大学院への志願情況でもこの分野のものが多い。卒業生には初期には学界と教育界、特に後者に進出する者が多かったが、近年はその比率が低下している。研究室の蔵書には、今は亡き直居の旧蔵書を含めて中世史関係の多いのが特徴であるが、現在は他分野の文献の充実にも努めている。

四　文学科

国語国文学

国文学講座（旧法文学部文学第二講座）の初代主任教授は新古今和歌集、源氏物語の研究で全国的に著名であった風巻景次郎である。風巻は一九四七年（昭和二二）六月着任以来、国文学研究を北海道に根づかせるため、意欲的な論文執筆、熱心な学生指導に加えて、啓蒙的講演、講座に全道をくまなく回り、北大の国文科、国文学会の現在の隆盛の基礎を固めた。

一九四八年には杉浦正一郎助教授が、一九四九年には野田寿雄助教授が着任し風巻を助けた。

一九五〇年文学部の分離独立とともに、新間進一助教授が、一九五一年には五十嵐三郎助教授、一九五二年には藤

岡忠美助教授が着任し、スタッフもしだいに充実してきた。

風巻らの熱心な指導の下に研究活動も活発をきわめ、一九四九年には早くも教官、卒業生、在学生を含む研究会、国文学会が設立され研究誌的な性格の「会報」が発行されている。これはさらに発展し翌一九五〇年には会則を備えた学会組織である北大国文学会となり、「会報」も『国語・国文学研究』となり今日に至っている。このような風巻教授を中心とする教官の熱心な指導により、卒業生の中から多くの研究者が育っていった。一回生から一〇回生（一九五八年卒）までの間に、大学の教授となった者二〇名、助教授九名を数えている。

一九五八年、風巻教授が健康上の事情で関西大学へ去り、野田助教授が講座担任を継いだ。野田は近世小説、特に西鶴の研究者として著名であり、『近世小説史論稿』『西鶴』『近世文学の背景』など著書も多い。野田は病軀を押して、また時に学部長などの重責を負いながらも、風巻のおいた基礎の上に国文科を充実させることに尽瘁した。五十嵐、藤岡、和田が当時の教官スタッフであった。この年一九五八年、大久保正助教授、翌一九五九年には犬養廉講師が着任する。野田らの努力と風巻時代の蓄積が実って、学会は活発な活動期に入った。『国語・国文学研究』は年三回発行されることとなり、一九六三年九月、全国大学国語国文学会・和歌学会の合同大会、一九六五年九月、万葉大会、一九六七年六月、近世文学会、など全国的な学会を相次いで主催できるほどに、北大国文学会は成長した。その充実ぶりが評価されて、一九六五年度より国語学講座が設けられ、西田直敏助教授が着任した。一九六七年には第五回卒業生の近藤潤一助教授が着任する。野田教授担任時代の第一一回生（一九五九年三月卒）から第二八回生（一九七六年三月卒）の中から育った研究者は、大学教授一、助教授七、講師三名を数えている。一九七四年、古典語の文法的研究のほかに北海道方言の言語地理学的研究にも大きな業績をあげた五十嵐教授が定年退官した。

一九七六年三月、野田教授は定年退官し、西田助教授が国語国文学研究室の責任者となった。西田は平家物語を中

心に文体論研究に業績をあげている。

現在の教官スタッフは西田のほかに、教授、和田謹吾、近藤潤一、助教授、大朝雄二、亀井秀雄、神谷忠孝、石塚晴通、井上史雄（一九七七年転出、後任宮沢俊雅助教授）である。

和田は自然主義文学の作家論で著名なほか、新進の育成にも幅広い活躍をしている。近藤は師風巻の衣鉢を継ぎ平安和歌史研究で全国的に著名であるばかりでなく、近代国文学研究史研究にも優れた業績をあげている。大朝は一貫して源氏物語研究に打ち込んでおり、亀井は伊藤整、中野重治、大岡昇平らの現代作家論に鋭い分析を示すと同時に明治初期にも業績をあげるなど広い守備範囲を誇っている。神谷は横光利一、プロレタリヤ文学など、昭和を専攻。石塚は国語史特に音韻史を研究対象とし、木簡をも研究材料としている。さらに宮沢は平安朝の古辞書の文献学的研究。このように各教官の研究分野はあらゆる時代、ジャンルを網羅しており、『国語国文学研究』を中心とする活発な活動を見ると、風巻がまき、野田が水を注いだ北大国文科は今や開花期に入ったと言ってよいだろう。

中国文学

法文学部の草創期、中国文学講座には武田泰淳助教授のほか中国語の専任講師として伊藤正がいた。武田は一年足らずで辞任、帰京して作家生活に入り、一九四九年（昭和二四）猪俣庄八が跡を引き継いだ。同年伊藤漱平助手が加わり、さらに一九五一年教養課程の外国文学Ⅱの担当者として飯塚朗助教授が加わった。これに旧予科以来の樟本成美、八木沢元両講師（一般教育漢文講読担当）を加えたのが初期の全陣容である。

中国文学研究室は、二代目の猪俣庄八がその基礎を作った。猪俣は魯迅研究に励むかたわら、釣りや流木の収集に打ち込んだが、教授昇任まもない一九六七年に他界した。彼の旧蔵書の一部を購入した「猪俣文庫」が遺愛の流木とともに研究室に在る。猪俣を陰に陽に援け、大学院文学研究科に中国文学専攻課程（修士・博士）を設置するにあずかって力あったのが飯塚朗であるが、同教授も一九七一年に定年退官して関西大学に転じた。武田・猪俣・飯塚を列

挙してみると、いずれも反漢学・反支那学を標傍した中国文学研究会の旧同人である。このことがよくもあしくも現在のこの研究室の学風を規定したといえようか。

猪俣時代の中期、尾上兼英（現東大教授）が助教授としてこれを助け、研究室の整備に著功があったが、その後任近藤邦康（近・現代思想史専攻）は、猪俣の急死、さらには大学紛争と続く難局を切り抜け、一九七〇年旧縁浅からぬ伊藤漱平を講座担当として迎えると、自らは一九七四年東大へ転出した。中国哲学の佐藤震二に続いて近藤助教授が去り、近・現代の分野が手薄になったことは否めない。伊藤教授は『紅楼夢』の研究に功を積んだ「紅学」者であり、書を愛する重厚な学者であった。

中国語のほうでは、伊藤正講師の定年退官後その後をうけた平山久雄講師は久しからずして東大へ去り、現在の大島正二助教授が来任した。音韻学、ことに中古字音研究の専門家だが言語学科（東大）出身である点が強みである。一方、飯塚教授の後任には異色の弟子中野美代子助教授が入った。近・現代文学から古典詩文まで守備範囲が広いが、特に清末文学に精しく、学部・大学院の授業も兼担して、作家・評論家としても活躍中である。

近藤邦康の後任には近・現代文学の専門家である丸尾常喜助教授が入ったが、ほどなく、研究室の充実に著功のあった伊藤漱平教授は一九七七年に東大に転出、大島がその後をうけて四代目の講座担任となった。一方、それまで丸尾がもっていた一般教育中国語の担当者として、毛沢東集の編者の一人として知られる藤本幸三助教授が来任。なお、この研究室では、日常の学術交流の場として中国文学談話会が活動しており、機関誌『熱風』第三号を出したばかりの「魯迅を読む会」も、数年来地道に活動を続けている。

英語英米文学

英文科は初代の主任に柏倉俊三教授を第二高等学校から迎え、現在一般教育担当の鈴木重吉教授を助手として発足したが、一九五一年（昭和二六）英語学の福村虎治郎助教授が着任して、陣容が整

った。柏倉はすでにエリザベス朝の劇作家クリストファ・マーロウとファウスト伝説の研究などで一家を成しており、『ファウスト伝説考』（一九四九年）、『シェイクスピアとその周辺』（一九五三年）と研究成果を次々と出版したが、学生の教育にも時間と労力を惜しまず、まごころと情熱をもって当たり、学生の研究指導が深更に及ぶことも珍しくなかった。北海道が好きでたまらず研究資料の乏しさを少しでもカバーしようと文献のつまった重いリュックサックを背負っていくども津軽海峡を渡ったが「あまり苦にならなかった」という。こうした努力が見事に結実して、当時の在学生卒業生がひとつになり、柏倉を中心として英文学同好会「オリオン・ソサイエティ」が組織され、一九五二年秋研究誌『ザ・オリオン・リヴュー』創刊号が、翌年には第二号が発刊された。英文科の土台を築き多数の研究者を育成した同教授に対して、一九五九年同僚と門下生の手で編まれた『柏倉教授還暦記念論文集』が捧げられたが、一九六二年同教授は定年退官し、北大名誉教授となった。

一九五三年大学院文学研究科の設置とともに英米文学専攻が発足したが、そのスタッフには一般教育英語担当の本堂正夫助教授（一九六四年教授、七六年退官して名誉教授）が当初から参加した。その間、「オリオン・ソサイエティ」は発展的解消を遂げ日本英文学会北海道支部となり、学会誌『北海道英語英文学』の年一回の発行を続けて現在に及び、また一九五四年から毎年企画されている文芸講演会は英米文学だけでなく国文学の風巻景次郎教授らも講師に加えて開催され、現在は「英米文学講座」として札幌の市民学生に親しまれている。当時の英文科のこれらの活動は、現在一般教育英語担当の木越富士彦教授（第一期卒業）や同外国文学I担当の本田錦一郎教授（二期）の努力に負うところが大きかった。

柏倉の退官後、福村教授（一九七七年退官、名誉教授）が主任となり、伝統的文法を基礎に構造言語学や生成変形文法を批判的に取り入れた広い視野と厳格な研究態度とによって学生を指導し、一九六三年に赴任した高松雄一助教授

（一九六九年東大へ転出）は、ジョイス、ダレルなど二十世紀小説の翻訳の仕事を通して学生に刺激を与え、W・B・イェイツの詩を講じた。一九六八年英語学講座が増設されて福村は同講座へ移り、同年十月英米文学を担当する平善介助教授が東北大学から着任して、シェイクスピア、十七世紀の形而上詩人たち、十八世紀イギリスの文学批評・文学理論を講じて現在に至っている。また一九七一年には英語学講座に葛西清蔵助教授（第一一期卒業）が着任して英語史から生成変形文法に及ぶ幅広い研究教育を行っており、一九七四年にはイギリス・ロマン派の詩人たちの研究で著名な森清教授（一九七八年退官、京大名誉教授）が京都大学から英米文学講座に赴任して、ワーズワス、シェリー、キーツなどを講じた。

英文科の卒業生は、大学院修了者も含めて、すでに六〇〇名を超え、それぞれが北海道の内外に広がり、教職をはじめ各方面にわたって活躍を続けている。例えば北大の一般教育英語担当の教官の大半は柏倉、福村両教授の薫陶を受けた人々であり、その他の北海道の各大学で英語英文学を教えている卒業生も非常に多い。現在の英文科はいわば若返りの時期にあり、遠からず新しい学風が生まれてくるものと期待されている。

独語独文学

一九四七年（昭和二二）法文学部創立に際し、六月、高橋義孝が文学概論・西洋文学担当の助教授として招かれた時に歴史が始まる。高橋は現代ドイツ文学のほか文芸学、深層心理学にも関心をもつ気鋭の学者だったが、一年余の在任で辞職、一九四八年に小栗浩助教授が着任、一九四九年法文学部に文学二講座が増設され（計五講座）、独文学は文学第四講座としてその後の基礎が作られた。小栗は木村謹治の流れを汲むゲーテ研究者で、後に『西東詩篇研究』で文学博士の学位を得た。小栗が恩師木村博士の没後、北海道の助成金を得て譲り受けたその蔵書は「木村文庫」として研究教育に大きな貢献をした。

小栗は一九六四年教授に昇任。その厳しい指導の下で多くの若手研究者が育ち、北大独文科の学風が作られた。現

在一般教育部門の教官には小栗の門下生が多い。一九七三年東北大学へ去るまで講座の主任を勤めたが、一時期石川道雄を教授として迎えた（一九五七年）。石川はホフマンの研究者・翻訳家として著名だったが、詩人としても一家を成し『半仙戯』などの詩集がある。奇行逸話に恵まれた人物だったが、一九五九年現職で死去。一九六二年、小栗の弟子青柳謙二が一般教育から配置替えになり、一九六四年助教授に昇任。トーマス・マンなど現代文学を専門とするかたわら、小説理論にも関心を寄せている。

一九六九年五月、独語学講座が増設され、独文学専修科は独語独文学専攻課程と改称された。一九七〇年京大から塩谷饒が教授として着任。塩谷は戦後早くにドイツ語学の本格的研究に取り組み、ルター以来のドイツ語の歴史的研究で名を成しているほか音韻論、方言の研究でも業績がある（『ドイツ語発音の研究』『ドイツ語史』など）。一九七五年から文学部長の要職を勤めた。一九七四年には東教大から川島淳夫が助教授として独語学講座に着任。ドイツ文法理論を専攻し、生成変形文法など新しい言語理論の展開が研究分野。一九七五年にはドイツ・マンハイム言語研究所に研究員として招かれ、日独文法の比較研究に従事した。

一九六五年六月には大学院文学研究科に独文学専攻（修士課程）が、一九六七年には博士課程が設置されて、以来若手研究者を育成し、現在これらの出身者が道内外の大学でドイツ語担当教官として研究教育に活躍している。

北大の独語独文学はヘルマン・ヘッカーを抜きにしては語ることができない。昭和の初め北大予科のドイツ語講師として着任以来三七年間、生に対する畏敬と人間性への信頼に貫かれたヘッカーの教育は、滝沢義郎（元農学部教授）一家の温かい人間関係に支えられて、大学内外で多くの人に人間的に大きな影響を及ぼした。法文・文学部講師となってからは独文学史、独文学演習などを講じたが大学院では古典学も教えた。一九六五年高齢のため退職、北海道大学名誉博士の学位を贈られたが、一九六七年四月二十日八六歳で札幌に骨を埋めた。ドイツ人教師としてはその後デ

イーター・シューマー、ユルゲン・フリードマン、ヨープスト・シュパンナーゲル、ウルリヒ・バルベラー（以上専門教育）、エーバーハルト・ベーニガー、クラウス・フォルダービュルベッケ、ヘルビッヒ・ケンプァ（一般教育）がその職に就き、ドイツの言語・文化の伝達に尽力している。

北大での日本独文学会全国大会の開催もすでに三回にわたり、一九七四年には従来の学会北海道支部を発展的に解消して、広く北海道で独語独文学の研究教育に携っている人々を会員とした北海道ドイツ文学会が発足、年二回研究発表会を道内各地で行っている。また主として北大の研究者を同人として一九六三年雑誌『ノルデン』が創刊され、現在一四号を数えているほか、独語独文学専攻課程でも一九七四年から『独語独文学科研究年報』を刊行し、教官学生に研究発表の場を提供している。

ロシア文学　国立大学では初めての露文学講座（現ロシア文学講座）に東京外国語学校（現東外大）から木村彰一助教授を迎えて発足した。木村の専攻は言語学（古典語）であったが、ロシア語、ロシア文学に傾倒し、斯界の先達八杉貞利との共著『ロシア文法』（一九五三年）を完成した。ロシア語、教会スラブ語のほか、文学関係の講義、演習では文献学的な姿勢から中世から現代に至るあらゆるテキストを採り上げた。四年後にレールモントフ、ツルゲーネフに詳しい北垣信行助教授が着任した。毎学年二、三名であった学生数もこのころから漸増して四、五名となった。

新制大学となってから教養課程におけるロシア語は選択科目で時間数もわずかであったため、学生は専攻課程に移行してからロシア語を修得するケースが多くなり、これが大きな負担となった。

一九五三～五四年木村教授はハーバード大学に留学、一九五六年には東京大学に移った。一九六二年中世文学を主な研究領域とする福岡星児助教授が教養課程から講座に移った。翌年春北垣が東京大学へ転出。同年教養課程に川端

（旧姓山本）香男里講師（ロシア詩）が着任。さらに川端が講座へ移ったあと、一九六六年城田俊助教授（ロシア語学）が着任して、メンバーが一新した。

川端が文部省在外研究員としてモスクワ大学に留学、ついで東京大学へ転出したあと、大学紛争の後しばらく空席となっていた講座に一九七五年灰谷慶三助教授（ゴーゴリその他）が入った。上記のメンバーのほか法学部附属スラブ研究施設の外川継男教授、出かず子助教授が随時講義を担当している。

日本におけるロシア文学の研究はなお日が浅く、当面の課題はディレッタンティズムの克服にあると言わざるを得ないであろう。また基礎を成すロシア語の研究、教育に当たって言語学的な、あるいは歴史的な視野を欠くうらみがあり、他のスラブ諸語の研究もほとんど無視されているので、ロシア語学講座の併設によって充実を図ることが望まれている。

言語学

言語学講座は一九五七年（昭和三二）三月三十一日に設置された。それより先、知里真志保は一九四七年臨時講師、一九四九年専任講師となり、「アイヌ語・アイヌ文学」を講じてきたが、一九五八年教授として本講座を担任した。知里はアイヌ語学・アイヌ文学を専門とし、在任中大著『分類アイヌ語辞典』などの著書のほか、多くの論文を発表し、アイヌ研究の水準を高める大きな貢献をした。一九五四年北大から文学博士の学位を受け、また北海道新聞社会文化賞、朝日文化賞を受賞したが、一九六一年病没した。

一九六四年池上二良が教授として着任し、本講座を担当した。池上はツングース・満州語学を専門分野とし、着任後オロッコ語録音資料の表記と訳注、江戸時代文献によるサンタン語の研究、オロッコ語、満州語の個々のテーマの研究をしてきた。その他、概説的論文などを発表している。日ソ学者研究員交換計画により一九六九年滞ソ、エウェンキー語資料を採集しその発表を行ってきた。

一九六四年池田英三助教授が着任。池田は西洋古典学を専門とし「テオフラストスの形而上学」及び「ホメーロスの比喩」に関する研究を発表している。

一九六五年四月、言語学専攻課程が設置された。「言語学概論」「言語学演習」は池上が担当し、「言語学」は池上、池田、非常勤講師服部健、下記の田中、宮岡その他が担当してきた。ほかに、「言語比較方法」（教養課程担当助教授田中利光）、「音声学」（池上、工学部教授仲丸由正、永田邦一、非常勤講師宮岡伯人、教養課程担当助教授城田俊）などが行われている。

一九六九年大学院文学研究科に言語学専攻修士課程が、一九七一年博士課程が設置された。授業科目の「言語学特殊講義」は池上、教養課程担当教授五十嵐三郎（一九七四年退官）、池田、田中が担当し、「言語学演習」は池上、田中が講じた。

文学部学科共通科目として、「アイヌ語学・アイヌ文学」（久保寺逸彦非常勤講師）（一九六六年）、「スペイン語」（寺崎英樹非常勤講師）「朝鮮語」（崔炳七外国人講師）が開講されている。

言語学講座は一九七六年実験講座となり、設備図書が一段と充実されつつある。

なお、北大言語学談話会が一九六五年以来随時開かれ、毎回講師が講演を行っている。言語学に関する文学部公開講演会も、高津春繁その他の講師によって行われた。一九六五年には「北方言語研究者協議会」を池上が組織して北大で開き、また一九七一年には日本言語学会第六五回大会が北大で開催された。

一九六六年度から一九七六年度までの学部言語学専攻課程卒業者は二一名、大学院言語学専攻修士課程修了者は五名である。若いこれらの卒業生の今後の発展・活躍が期待される。

西洋古典学に関しては、文学部発足の当初から、ギリシア語学・ラテン語学が、西欧の哲学・文学専攻学生の必修又は選択科目として開講され、主としてギリシア語を哲学第二講座の諸教官が、ラテン語はドイツ文学のヘッカー講

師が担当した。ヘッカー講師は、一九五七年から、文学研究科の古典学特殊講義を一九六五年まで受け持ち、その研究業績の一部は Über Homers Ilias (1962) として刊行され、また退官に際しては大学から名誉学位を贈られた。一九六五年からは学部のギリシア語学・ラテン語学のそれぞれ初級・上級、大学院文学研究科における古典学演習・古典語学演習の諸科目を池田英三助教授が非常勤講師とともに、担当するようになった。

五　教養課程担当教官

教養課程担当教官のうち文系教官は文学部に所属し、学科目を構成している。哲学、歴史などは専門教育の講座と連係を保ちつつ教育を行っているが、人文地理のようにシニアに対応する講座のない学科や語学など、独自の活動、歴史を有する学科も少なくない（以下の記載は一九七八年現在の教官を中心としている。既に退職・転出された多くの教官に関しては教養部史の付録を参照していただきたい）。

〔哲　学〕

哲学には過去には花田圭介（一九五〇～一九五四）、岩崎允胤（一九五〇～一九五四）、吉田夏彦（一九五六～一九六〇）、秋間実（一九五四～一九六八）が教鞭をとったが、現在は河西章（一九五三～　）、大畑甚一（一九六三～　）、水野一（一九六五～　）の三名が担当している。

〔心理学〕

今井四郎（一九六六～　）、岩本隆茂（一九七三～　）、篠塚寛美（一九七五～　）の三名が現在の心理学担当教官。

〔歴史〕

佐久間重男（一九四九～一九七一）、北村文治（一九四九～一九七〇）、赤井彰（一九五〇～一九六三）、谷和雄（一九五一～一九五六）、篠塚信義（一九六四～一九六九）、小山皓一郎（一九七三～一九七七）の後をついで、井上泰男（一九六〇～　）、田中彰（一九六五～　）、佐伯有清（一九七一～　）、東出功（一九七〇～　）、中井英基（一九七八～　）、菊池俊彦（一九七八～　）が現在教養部の歴史学を担当している。

〔文学〕

阿部保（一九五一～一九七四）、飯塚朗（一九五一～一九七一）、樟本成美（一九五一～一九五七）、五十嵐三郎（一九五一～一九七四）、新間進一（一九五〇～一九五七）の五名で出発した教養文学担当陣はその後、藤岡忠美（一九五二～一九六八）、近藤光男（一九五七～一九七二）、犬養廉（一九五九～一九六七）、亀井秀雄（一九六八～一九七五）、井上史雄（一九七四～一九七七）らを送り迎えて、現在は和田謹吾（一九五七～　）、本田錦一郎（一九七四～　）、近藤潤一（一九六七～　）、大朝雄二（一九六九～　）、中野美代子（一九七一～　）、松川健二（一九七二～　）、神谷忠孝（一九七六～　）、宮沢俊雄（一九七八～　）の八名である。

〔古典語〕

はじめ哲学科の岩崎助教授がラテン語を講じたが、一九五八年から、専任の池田英三講師がギリシア語とラテン語を受け持ち、一九六五年からは田中利光助教授がこれを担当している。一九七七年からは古典語は学科目となった。

〔社会学〕

社会学は富川盛道（一九五三～一九六四）、塚本哲人（一九五五～一九五八）、笹森秀雄（一九五七～一九七三）、三谷鉄夫（一九六七～一九六八）、中島寅雄（一九六九～一九七四）を経て、現在は金田弘夫（一九七六～　）と大山信義（一九七四

～　）の二名が担当している。

〔社会思想史〕

社会思想史は徳永恂（一九五九～一九六四）の後、奥山次良（一九六七～　）と八木橋貢（一九六三～　）の二名。

〔人文地理〕

人文地理は、一九五二年（昭和二七）以来、井上修次教授（現本学名誉教授）によって担当されてきた。一九七三年（昭和四八）、同教授の定年退官に伴い、山口岳志助教授（現東京大学助教授）が来任し、図書の充実や対外交流にいっそう力が入れられるようになった。とりわけ、その在任中に定員増が認められたことは、文学部で人文地理学の講義を兼担する本学科目の特殊事情からも望ましいことであった。

現在、羽田野正隆、谷内達両助教授がその任に当たり、小林和夫助手の協力を得て、演習や野外調査を重視した教育が行われている。

本学では、国公立の総合大学としては珍しく、地理学の専攻課程が置かれていない。一方、教養部の中に、地理学を志望する学生も少なくないことから、本学科目としても、学部に関連講座の設置を強く望んでいる。

〔英語〕

一九四九年、教養部新設時の英語科のメンバーは吉田竜男、本堂正夫、川村米一、藤田清次、高橋保郎、丹治敏衛、鈴木重吉（以上在札幌）と中村太郎と高月福太郎の計九名である。シェイクスピア、浪漫派研究で著名だった本堂、グレアム・グリーンの丹治、英語学の吉田、川村ら、みな研究、教育に大きな功績をあげた後、定年退官し今新設当時を語りうるのは鈴木のみである。鈴木は日本アメリカ文学会（界）のリーダーの一人として著作、翻訳に活躍し、一九六五年には「ホーソン研究」で学位をとる一方、一九七四年～七五年には教養部長を勤めるなど、英語科の

中心的存在である。その他、ポープから比較文学に手堅い業績を残す木越富士彦、シェイクスピア、ミルトンを専攻し、公開講座を通じ対社会活動にも意欲を燃やす高久真一が教授である。

助教授では、英語教育の北市陽市、文法論の岡野哲、文法論と英語教育の浪田克之介、一般言語学の栗原豪彦の四人が英語学畑である。文学専攻はあらゆる時代、ジャンルを網羅している。柏木秀夫はバージニア・ウルフから比較文学に、片山厚はアメリカ現代の詩・演劇に業績をあげ、中田靖泰はシェイクスピア研究のかたわら、オックスフォード大学で日本学の講師も勤めた。柏木、片山、中田は旧制中学、北大予科、北大英文、現職に至るまで三十数年同じという珍しい例。佐藤信夫はジェイムズ・ジョイスより出発したが、幅広い学識を生かしての総合講義の中心。その他、エミリー・ブロンテの福浦徳孝、オルダス・ハックスリーの長野幸治、十八世紀英小説の渡辺洋、十九世紀世紀末の高橋宣勝、米文学の井上和子と多士済々である。講師には、ローレンスの簗田憲之、ディッケンズの下元輝明、キーツの橘本尚江、シェイクスピアの西堀ゆり、米文学の伊藤章、スウィフトの小川泰寛がいる。

外人講師も創設以来、レーン、バー、エディー、ヘイドン、スキールズ、ランドン、ルークリッジ、ルーカスを経て現在ロバート・ホールダー（米）とロードリー・ジョーンズの両名である。総勢二四名、毎月、月例研究会を開き、大学の紀要のほかに同人誌『ノーザン・レビュー』（年刊）を発行するなど、活発な研究活動を行っている。

〔ドイツ語〕

北大の独語独文学の発展を担っている有力な一翼は一般教育部門のドイツ語担当教官である。新制大学への切り替えに当たって旧予科ドイツ語教官の中から山岡直道、吉崎十七、中島篤、中島清が一般教育部門に残ったが、中でも山岡は唯一の教授としてドイツ語教育を充実させるべく、制度人事など各面で問題の解決に奔走したが、心労のためか一九五六年（昭和三一）九月急逝し、一般教育の礎石となった。後任として一九五七年六月岡山大学から着任した妹

尾幹は古代ドイツ文学、中世ドイツ語文章論などの研究で知られていたが一九六一年病気のため辞任、間もなく死去した。一九五〇年助教授として着任した井手貴夫（あやお）は一九六四年教授に昇任。著名なヘッセ研究家・翻訳者で、ヘッセと親交があり「若きヘッセ研究」の大著がある。一九七四年定年退官し、名誉教授となった。一九六九年教授になった藤井智瑛は、一九六三年広島大学から着任。中世ドイツ文学から現代文学まで幅広い学識を有し、一時大学院の演習を担当した。スキーの名人でもある。古内武は一九五九年着任。講師助教授を経て一九七二年教授。ニーチェ研究に打ち込み、原典考証に新説を打ち出している。一九七四年教授になった永井義哉は一九五二年から在勤。レッシング、ゲーテの研究者。小栗の培った学風を受け継ぎ後進の指導に当たっている。北大出の教授新妻篤は山岡の愛弟子でケラーを中心に十九世紀文学を研究。早くにスイス、ドイツに留学した。目下教養課程の改革問題に取り組んでいる。一九七七年教授になった澁谷寿一はカフカの専門家で新妻と同期生。現在ドイツ・ボン大学に留学中。

一九七八年現在定員二三名を擁する一般教育部門のメンバーはこのほか、出身校、関心領域とも多彩である。リルケ研究書をはじめいくつかの現代作家の翻訳及び紹介で知られる函館在勤の山崎義彦（東北大、ドイツ文芸学）、多年ベルリン及びウィーンで演劇を専攻し、自身演出も手がける津川良太（学習院大、オーストリア演劇）、ハイデルベルクでみっちり中世ドイツ語を鍛えられてきた万能スポーツマンの岡崎忠弘（広島大、中世ドイツ文学）、印度哲学及び東洋思想にも関心の深い堀江道雄（北大、ヘッセ）、吉田敏彦（京大、ホーフマンスタール）、小崎順（北大、トーマス・マン）、藤鷹尚真（広島大、レッシング）、仲田和弘（東北大、グリンメルスハウゼン）、小林敢一郎（北大、ヘッベル）、山中智之（東北大、G・ベン）、野田克己（名大、トーマス・マン）、加納邦光（東北大、クライスト）、筑和正格（慶応大、フォンターネ）、吉岡義彦（東大、トーマス・マン）、石川裕美（北大、ドイツ語学）、佐藤拓夫（東北大、ホフマン）、高橋吉文（北大、デュレンマット）、佐藤俊一（北大、ドイツ文法理論）のほか、一九七七年夏以来エーバーハルト・クレーベルクがベル

リンから独人教師として加わっている。

大世帯の利点を生かすべく、毎学期開かれる独人教師を囲むコロキウムと併行して、常時いくつかの研究会、読書会が続けられており、学外からの参加者も多い。

〔フランス語〕

フランス語教育は、法文学部開設に伴い、専任講師となった太黒マチルドにより始められた。一九五一年（昭和二六）、後藤辰男が初代の文学部所属フランス語担当教官として着任。一九五四年、出口裕弘着任。ようやく学科としての体裁が整う。敗戦後の混乱はなお続き、文化的荒廃も癒えない社会的状況を背景に、札幌所在大学における最初のフランス語学科の発足は、大きな期待をもって迎えられた。こうした社会的要望にこたえ、一九五〇年代から一九六〇年代中ごろまでの学科の活動は、教養部・文学部における研究教育と並行しながら、フランス文学・芸術の紹介、講演会の開催、日仏協会を通ずるフランス語の普及・教育活動を積極的に行った。学生、市民、学内外の教官と緊密に提携しつつ、社会に向かって開かれた姿勢を保ったこと、これが学科の大きな特色であったといえる。

太黒マチルドは、孤高と見えるほどに厳しく精神の自律を己に課しながら、他者に対しては寛容、温厚であり、常に学科の中心にあって多くの学生・市民に大きな感化を与えた。一九七五年、七三歳で死去するまで教壇に立ち、フランス語教育に献身した。後藤辰男は、寛濶な人柄で多くの学生をひきつけ、優れた教育者であり、また、プルースト研究に鋭い洞察を示している。緻密な頭脳と確かな実行力を生かして、入試に関する制度、運営等、学内行政の面でも貢献するところが大きかった。この両名が学科の基礎を固めた。

一九六五年以後になると、社会状勢の変化を反映して、学科の活動も急増する学生に対する教育に専ら集中されるようになる。定員も急増し、一九六六年にはフランス人教師のポストも設置された。しかし、研究教育条件の改善は

遅々としており、大学紛争の教訓も教育実践に生かすことができず、語学教育に本来なじまないマスプロ授業システムの中で、有効な方法を求めて試行錯誤しているのが現状である。

現在の定員は六名。十八世紀の百科全書派研究の中山毅、一九六三年から六年間、フランスに留学し、グルノーブル大学の博士号を持つスタンダール研究の梶野吉郎、パスカル研究でボルドー大学文学博士の大友浩、カミュ研究の菊地昌実、ラ・ロフシュコー研究の池沢克夫、ジョルジュ・バタイユ研究の西昌樹である。

〔ロシア語〕

ロシア語は最初選択科目だったが、一九五五年（昭和三〇）福岡星児が専門教育ロシア文学講座の助手から講師として着任。一九六二年、福岡が講座へ移ったあと、川端（旧姓山本）香男里講師が、さらに一九六五年川端が配置換えになったあと一九六六年城田俊が助教授として着任した。

教養課程のロシア語を第二外国語とすることは北垣助教授時代以来の懸案だったが、理学部をはじめとする他学部の賛同を得て、福岡、川端が教養部長に建議書を提出、一九六七年四月から実施される運びとなった。

これに伴って以後教養課程におけるロシア語担当教官は漸次増員され、現在は城田のほか、内藤操教授（ロシア文化）、藤家壮一（ロシア批評）、小平武（ロシア詩）、中村健之介（ドストエフスキー）、工藤正広（ロシア詩）各助教授を加えた計六名の陣容となり、専門教育の授業をも担当している（内藤は一九七八年転出、山田吉二郎講師がこれに代わった）。

〔中国語〕

中国語はまだ官制上の学科目として認められていないが、丸尾常喜（一九七三〜一九七五）についで藤本幸三（一九七六〜　）が担当している。

六　北方文化研究施設

北方文化研究施設が官制として出発したのは、一九六六年（昭和四一）三月であるが、その淵源は古く戦前にまでさかのぼることができる。

北海道大学は、元来その地域的特色によって、創立時から、北海道を含むユーラシア北方圏に深い関心をもつ多くの研究者を擁してきた。そうした人々の熱意と努力によって、一九三七年十月、本部直属の形で人文科学（歴史学・考古学・民族学・言語学）・自然科学（人類学・動物学・植物学）を網羅した、北方文化研究室が開設されたのである。爾来、研究室は日本における北方文化研究のひとつの核としての役割を果たしてきた。その研究成果は、『北方文化研究報告』第一―二〇輯（一九三九年～一九六五年）として発表され、そのユニークな内容によって内外の注目を集めた。

一方、一九四七年に法文学部が創設されるとともに、北海道を含む北方諸地域の総合的研究機関設置の希望が起こり、こえて一九五〇年文学部が開設されるに及んで、そうした研究機関付置の要望が学内外から強くなった。こうした要望にこたえて、文学部は、当時の杉野目学長をはじめ北方文化研究室等学内諸機関とも協議の上、一九六四年七月、学内措置として、文学部にユーラシア文化研究室を開設した。趣意書によれば、「ユーラシアとは、アジア・ヨーロッパ大陸全体の呼称であるが、学界の常識に従って、ユーラシア北方圏（Eurasia Septentrionalis）の意味に用い」、その地域を研究範囲とすることを述べている。研究室は、翌一九六五年その研究の成果を『ユーラシア文化研究』第一号として刊行した。

こえて一九六六年、官制として文学部付属の研究施設の開設が認められ、ここに北方文化研究室・ユーラシア文化研究室を併合・継承するものとして北方文化研究施設が発足したのである。研究施設はまず第一部門（考古学）によって出発し、一九七三年第二部門（文化人類学）を加えて現在に至っている。なお、第一次計画として、上記二部門のほか、第三部門（言語学）・第四部門（人文地理学）の新設が計画されている。また、前記『北方文化研究報告』『ユーラシア文化研究』を合併・継承する『北方文化研究』第二―一〇号（一九六六～一九七六年）を刊行して、その研究成果を公にしている。この間、昭和四二年、英国大使館員トムリン、フィゲス両氏から旧マンロー邸の寄贈を受けて二風谷分室を開設し、また一九七六年には、斜里町・斜里町郷土研究会の協力をえて、斜里分室が設置されている。

第一部門（考古学）　一九六六年（昭和四一）、北方文化研究施設創設とともに出発した第一部門は、七月異例の人事で当時医学部講師であった大場利夫を教授として迎え、実質的な研究活動を開始した。すなわち、研究施設設置の目的たる「北海道大学における従来の研究実績と、その有する研究資料を基礎とし、……ユーラシア北方圏（北海道・千島・樺太・アリューシャン・カムチャツカ・アラスカ・シベリア・中央アジア・極北ヨーロッパなどの地域）の文化の総合的研究」にこたえる形で、当面の研究対象として、北海道の先史時代文化のうちできわめて特異な性格をもち、アジア大陸東北部と、あるいはさらに極北圏を含む北太平洋沿岸地域一帯と、深い関連をもつものと考えられるオホーツク文化をとりあげることとして、同年八月着任した助教授大井晴男とともに、稚内市オンコロマナイ貝塚の発掘調査を実施したのである。

爾来、オホーツク文化の研究は、一貫して第一部門の研究活動の中心的テーマとなってきた。この研究に関連して行われたフィールド・ワークは、数年にわたる継続調査が行われたものを含めて、前記オンコロマナイ貝塚のほか、礼文島香深井遺跡・同元地遺跡・稚内市抜海遺跡・同声問貝塚・猿拂町浜猿拂遺跡・枝幸町目梨泊遺跡などがあり、

併せて北海道における関連する遺跡の分布調査、主要な聚落遺跡の微地形測量調査などが行われつつある。従来のオホーツクの文化の研究の経過からみて、研究上の空白地域になっていた道北地方を中心とする計画性をもった調査は、全くタイムリーなものだったといえよう。一連の調査によって集積された資料・データ及びそれらを材料とした研究は、単に道北地方のオホーツク文化の解明に資したのみでなく、他の地域を含めた総体としてのオホーツク文化の研究を、ほとんど飛躍的に、進展させたといえそうである。なお、これらの成果は『北方文化研究』に発表される他、『オホーツク文化の研究』全六巻（1・2既刊）として刊行することが予定されている。

そのほか、これと並行する形で、やはりアジア大陸と関連するものと考えられる先土器文化・石刃鏃文化・いわゆるストーンサークルについても、研究が進められている。

教授大場利夫は、一九七六年四月一日付けで定年退官し、代わって同年八月林謙作が助教授として着任した。大場の退官は、やはり部門の一時期の終りを意味するかもしれない。それは、いわば部門の草創期であったといってもよかろう。時あたかも、オホーツク文化の研究はその一段階を終わろうとしている。部門はいまようやくその第二期に入り、これまでの研究の有形・無形の集積の上に、新たな発展・飛躍の時を迎えようとしているのである。

第二部門（文化人類学）

一九七三年（昭和四八）、研究施設開設後七年を経て、ようやく設置された文化人類学部門は、七四年三月に早稲田大学から迎えられた岡田宏明の着任とともに研究活動を開始した。当部門に課せられたテーマは北方圏諸民族の文化人類学的研究であるが、その範囲はきわめて広大である。アジア大陸の東北部だけでも、北大では永い研究の伝統をもつアイヌをはじめ、ギリアーク、カムチャダール、コリアーク、チュクチ、ユカギール、アレウト、エスキモーなどの古アジア族から、新しい移住者であるフィン、サモエード、ヤクート、モンゴル、ツングースなどの諸民族が対象として含まれる。しかも北欧や北米北部の住民も視野

に収めねばならないとなると、基礎的文献の収集だけでも容易な仕事ではない。

当部門には一九七五年四月に黒田信一郎助教授、同年五月には井上紘一助手が発令され、スタッフが整った。それ以来今日まで、わが国には他にほとんど例を見ない北方諸民族の研究センターとして、文献その他の資料を整備することに全力を傾注してきた。研究対象が広すぎるので、まだまだ不十分ではあるが、それでも四年という短期間にしてはかなりの資料が集積できた。

文化人類学部門の各スタッフは、それぞれ独自の研究領域をもち、エスキモー、ギリアーク、ラップなどの諸民族に関し調査研究を続けている。ことに、岡田のアラスカ・エスキモーの遺跡調査は、科学的な発掘による資料を初めてわが学界にもたらしたことで注目を集めている。部門としてまとまった、実質的な研究成果はまだ今後にまたねばならぬ段階にあるが、そのための足がかりとなる仕事はすでに緒についたといえる。

北方圏の諸民族とその文化を研究しようとする者にとって、ソ連邦領土内で自由に調査を実施できないことが非常に大きな障害になっている。将来は、ソ連の研究者を含めた国際的協力の推進、強化によって現在の隘路を打開すべきであり、そのためにわが研究施設が少しでも寄与できればと切に希望している。

あとがき

本稿は、一部を佐藤一郎・中田靖泰・青柳謙二の三名が分担執筆し、二部は各専攻から提出された資料をもとに、専攻別の人と研究をとりまとめるという形をとった。各専攻によってそれぞれ異なる研究の状況を伝えたかったためである。資料について学内の諸機関並びに北海道新聞社の協力を得た。

（佐藤一郎）

一　1951年度講義時間割　●印1学期、○印2学期、その他通年

	月	火	水	木	金	土	
八、三〇——一〇、三〇	●ロシヤ文学特殊講義 教育史概説 ○中国文学史概説 ○東洋テン語(初) 北垣 鈴木	ラテン語(中) 教育学特殊講義 ヘッカー 板野 猪俣 倉田	○ラテン語(初) ○国文学史概説 ヘッカー 板野	●心理学 ○英文学史概論 結城 新倉	倫理学演習 中心理学概説 独文学史概説 斎藤(忍) 伊藤 ヘッカー 鳥山 演習2	○独文学史概説 国文学 ヘッカー 坂井 演習4	科目 教官 教室
一〇、四〇——一二、四〇	●哲学演習 ○西洋哲学史概説 ○ロシヤ文学史概説 ○中国哲学概論 ○国文学演習 ○社会学演習 ○ギリシヤ語(初) 仏教学演習 東洋テン語(中) ヘッカー 板野 猪俣 倉田	社会学特殊講義 西洋哲学史演習 独文学演習 斎藤(忍) 木村 堀 新倉 演習3	中国哲学史概説 西洋哲学史概説 ロシヤ文学史概説 印度哲学史概説 ○国文学演習 ○中国文学演習 ギリシヤ語(初) 鈴木 佐藤 井垣 演習3	●心理学演習 ○国哲学概論 ○独文学概論 ○ロシヤ語学(初) 阿部 栗田 演習5	倫理学演習 心理学実験(I) 国語学(前期) 社会学演習 中国哲学演習 西洋哲学史特殊講義 ロシヤ文学特殊講義 英米文学演習 国文学演習 倫理学演習 中国語(前期) 佐藤 関 城田 巻 演習6	科目 教官 教室
一、三〇——三、三〇	●ロシヤ文学特殊講義 ○国哲学概論 ○英米文学概説 ○西洋哲学史概説 ○中国文学演習 ○倫理学実験(II) ヘッカー 関 倉 井 演習3	西洋哲学史特殊講義 東洋史演習 社会学概論 独文学概説 斎藤(忍) 木村 猪俣 倉田 演習3	中国哲学史概説 西洋哲学史演習 社会学概論 ギリシヤ語(初) 鈴木 佐藤 倉田 演習3	●心理学実験(II) ○倫理学概説 ○英米文学演習 ○中国哲学概説 ○西洋史概説 ○ロシヤ文学概説 北垣 結城・田中 柏倉 演習2	アイヌ語アイヌ文学 教育学演習 知里 井 演習4	○心理学実験(I) 結城 演習1	科目 教官 教室
三、四〇——五、四〇	○独文学史概説 ○中国語(前期) ギリシヤ語(中) ○中国文学史概説 ○社会学概論 ○ロシヤ語学(初) フランス語(初) ヘッカー 伊藤 猪俣 関 村 太 黒 斎藤(忍) 演習2						科目 教官 教室

二　一九五一年度講義題目

○印は二学期とする

教官名	講義題目	備考
哲学科		
伊藤　教授	哲学演習	ヘーゲル「論理学」続き
武田　教授	西洋哲学史概説	「トマス・アクイナスの哲学思想」前学年の続講
	西洋哲学史特殊講義	プラトン「国家」(ⅥⅦ前学年の続き)
	西洋哲学演習	「ヘーゲルに於ける国家と市民社会」
斎藤(信)助教授	哲学	Hegels Philosophie des Rechts
	哲学演習	「存在論と自己意識」
細谷助教授	西洋近世哲学史(特殊講義)	カント「純粋理性批判」
	哲学演習	易　経
竹内助教授	中国哲学講読	朱子語類(中国哲学専攻者に限る)
	中国哲学演習	
佐藤助教授	○中国哲学史概説	
	中国哲学史演習	
坂井　教授	サンスクリット文法	
	印度哲学演習	
	○印度哲学史概説	

教官名	講義題目	備考
平川助教授	仏教概論	
	パーリ語	
須田　教授	○倫理学概論	近代自我論
	倫理学特殊講義	アリストテレス・ニコマコス倫理学
	倫理学演習	文　法
斎藤(忍)助教授	ギリシャ語初級	文法と講読
	ギリシャ語中級	アリストテレス「メタフィシカ」
	倫理学演習	新制二年目必修
結城　教授	○心理学実験Ⅰ	一学期より二学期まで通す。一週二時間、新制第三年目必修。心理学実験Ⅰを修了した者のみ
	心理学実験Ⅱ	音響心理学(一学期)一週四時間
	心理学	(二学期)一週四時間
田中助教授	○心理学概論	結城教授と合同
	心理学実験Ⅱ	
	心理学演習	心理学的測定法
	心理学特殊講義	

教官名	講義題目	備考
鈴木　教授	社会学演習	
関　助教授	社会学特殊講義	村落と都市の研究
	○社会学概論	
	社　会　学	特殊講義（前年度の続き）—
	社会学演習	社会設計
		原書講読
史学科		
板倉助教授	○西洋史概説	古代史
	史学概論	
阿部助教授	国　史	上代史（平安時代）
	国史演習	（愚管抄）
新城助教授	中　世　史	荘園年貢輸送より商品流通への展開過程を中心として
	国史演習	「鎌倉時代の記録」（明月記及御成敗式目）
板野　教授	○東洋史	六朝時代思想史
	東洋史演習	漢書を使用する
藤井助教授	東　洋　史	中国経済史序説（宋代以後を中心として）
	東洋史演習	宋史食貨志
護　助教授	東　洋　史	
	東洋史演習	
堀米助教授	西洋史特殊講義	フランス中世史
	西洋史演習	
鳥山助教授	西　洋　史	
	西洋史演習	

教官名	講義題目	備考
文学科		
風巻　教授	国文学史	日本文学の諸問題
	国文学	平安末期の文芸
	国文学演習	源氏物語
柏倉　教授	○英文学史	
	英文学演習	テキスト Shakespeare : Richard II
	アメリカ文学	（内容は考慮中）
猪俣助教授	○中国文学史	（白話小説史）
	中国文学講読	（紅楼夢）
	中国文学演習	
小栗助教授	ドイツ文学特殊講義	（ドイツ十八世紀文芸思潮）ドイツ文学史の単位とすることを得
	ドイツ文学講読	ゲーテ西東詩集、ジンメル・ゲーテ
木村助教授	○ロシア語学	初歩
	ロシア文学演習	十九世紀作家講読
	ロシア語学演習	
北垣　講師	ロシア文学特殊講義	レールモントフの生活と作品（ただし一学期一杯）
	○ロシア文学史概説	十九世紀ロシア文学史（十九世紀前半）
伊藤　講師	中国語前期	一週二回（四時間）
	中国語後期	
知里　講師	アイヌ語アイヌ文学講読	アイヌ語法概要並びに叙事詩

四　各年次の職別職員数

年次＼職種	教授	助教授	講師	助手	非教育助手	教務職員	外人教師	技官	事務官	雇人	傭
1950	11	32	11	13			1		5	37	9
1951	13	31	12	16	1		2		4	24	6
1952	14	31	17	21	1		2		4	24	6
1953	18	34	12	29	1	1	2		4	23	6
1954	18	35	18	26	1		2		4	23	5
1955	19	34	21	25	1		2		4	23	5
1956	14	34	25	24	1	1	2		4	20	13
1957	14	37	23	25	1	1	2		4	28	6
1958	14	39	25	24		1	2		5	17	14
1959	13	36	28	23		1	2		8	15	15
1960	13	36	30	22		1	2		16	6	19
1961	11	50	22	17		1	2		15	12	12
1962	10	42	28	21		1	2		15	16	9
1963	9	47	25	22		1	2		27	5	9
1964	20	50	21	23		1	4		26	5	9
1965	19	54	22	24		1	3		25	5	10
1966	19	58	21	20		1	4		28	3	8
1967	25	61	23	24		1	5		29	5	8
1968	26	60	22	24		1	5		28	8	7
1969	28	61	25	24		2	4		27	7	8
1970	32	64	25	27		2	5		27	6	8
1971	32	64	22	26		2	5		29	5	8
1972	33	66	18	26		2	5	2	35		4
1973	33	69	15	25		2	5	2	34		4
1974	34	76	17	22		2	5	2	32		5
1975	34	78	18	23		2	5	1	29		3
1976	36	81	15	24		1	5	1	29		3
1977	36	75	17	24		1	5	1	29		3

教官名	講義題目	備考
ヘッカー講師	独文学演習 独語学演習 ○独文学史概説 ○ラテン語初級 ラテン語中級	Seminar : Faust Seminar : Goethes Gedichte Deutsche Dichtuug seit Goethes Tod.

三　蔵書数

年度	和書	洋書	合計
一九五五	四一、二五一	一六、五六四	五七、八一五
一九六〇	五五、七五八	二八、三一〇	八四、〇六八
一九六五	七五、九〇八	四六、七三三	一二二、六四一
一九七〇	八九、六五六	六七、四八〇	一五七、一三六
一九七五	一〇六、二九〇	八九、一四七	一九五、四三七

五　文学部卒業生就職状況

（1976年9月現在、判明分のみ）

職種＼卒業年	1950	1951	1952	1953(旧)	1953(新)	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975
小・中・高校教員	11	12	16 (2)	20	3	23 (1)	17 (1)	31 (1)	12 (1)	22 (4)	27 (3)	12 (1)	23 (5)	22 (1)	18 (6)	17 (1)	13 (2)	20 (5)	11 (1)	8 (2)	5 (1)	7 (2)	12 (4)	7 (2)	14 (3)	17 (6)	8 (3)
大学教員	11 (1)	16	24	23 (1)	11	9	16	13 (3)	14	15 (1)	17 (2)	10 (2)	14 (1)	12 (1)	12 (3)	9	14	8 (3)	15 (4)	14	6	9 (2)	6 (1)	5	3	1	1
公務員	2	4	5	4	2	4	3	7 (2)	11	11 (1)	10 (1)	11 (1)	7 (2)	7 (1)	12 (1)	4 (1)	5 (3)	3 (2)	5 (1)	3 (2)	7 (3)	11 (4)	6 (3)	11 (2)	13 (3)	25 (5)	15 (4)
ジャーナリズム関係	6	7	4	7	1	4	1	6	10 (1)	11	20	10	9	14	8	7	5	3	3	6	4	6 (1)	6 (1)	6	9 (1)	5 (1)	4
一般民間会社	5	3	7	3		9	10 (2)	5	9	6	10	16 (1)	19 (2)	16	14	12	11	13	15 (1)	14	12 (6)	7 (4)	24 (7)	17 (2)	31 (6)	16	16 (5)
自営		1	2	2	1	2	1		1		2	1			1	2			1				1	1			
自由業	1		2	1		1	1			1	1				1												
進学																					5 (1)	4	5 (1)	12 (2)	15	16 (3)	17
死亡	4 (1)		2 (1)	4	2	3	1	1	1	1	2		1	1			2 (1)	2	1				1				

備考　（ ）は女子で内数。
大学教員は、国、公、私立および高専、短大を含む。
公務員は、国家、地方、公社を含む。
1950年卒業生は法文学部哲学科、史学科、文学科の卒業生である。

年表

一九五〇（昭25）
4・1 法律第五一号をもって、国立学校設置法の一部が改正され、法文学部が文学部と法経学部に分離される
4・1 文学部に哲学一〇、史学五、文学五講座が置かれる
4・1 伊藤吉之助教授が文学部長になる
4・1 文学部内規制定
4・17 文学部規程が制定され、哲学科、史学科、文学科が設置される（4・1から適用）
5・9 大学院（旧制）第一回入学者二〇名が許可された

一九五一（昭26）
7・31 武田信一教授が文学部長になる
9・28 伊藤吉之助が名誉教授となる
12・17 文学部教官学生協議会案承認

一九五二（昭27）
4・1 文学部内規改正
5・31 北海道大学学位規程の改正により、本学において授与される学位の中に文学博士が追加される
6・25 法文学部設立五周年記念行事行われる

一九五三（昭28）
3・31 政令第五一号をもって国立学校設置法第三条の二第二項の規程に基づき、国立大学の大学院に置く研究科の名称及び課程を定める政令が制定され、北海道大学大学院に文学研究科その他が設置される
4・1 北海道大学大学院通則（'54・3・17制定）、文学研究科規程（'55・3・17制定）が施行される
5・13 文部省告示第四一号をもって、北海道大学大学院の各研究科に置かれる専攻の名称および課程が定められ、文学研究科に哲学専攻（博士課程、修士課程）、東洋哲学専攻（博士課程、修士課程）、心理学専攻（博士課程、修士課程）、社会学専攻（修士課程）、史学専攻（博士課程、修士課程）、英米文学専攻（博士課程、修士課程）、国文学専攻（博士課程、修士課程）が置かれる
7・10 文学部内規改正（教授会構成について現在の内規に同じ）

一九五四（昭29）
8・1 柏倉俊三教授が文学部長になる

一九五五（昭30）
8・3 文部省告示第八一号をもって、国立大学の大学院に新たに置く専攻の名称及び課程が定められ、北海道大学大学院の文学研究科に社会学専攻（博士

課程)、国史学専攻(博士課程、修士課程)、東洋史学専攻(博士課程、修士課程)、西洋史学専攻(博士課程、修士課程)が設置される

8・3　文部省令第八二号をもって文学研究科に置かれていた史学専攻(博士課程、修士課程)が廃止される

11・11　坂井尚夫教授(印度哲学)逝去

一九五六(昭31)

6・19　このころから東洋史学の教官、学生を中心に問題が発生した(いわゆる第一次藤井教授問題)。九月二三日一時沈静する

9・29　山岡直道教授(ドイツ語)逝去

一九五七(昭32)

2・1　武田信一教授が文学部長になる

3・31　文部省令第五号をもって国立大学の講座に関する省令の一部が改正され文学部に言語学一講座が増設される

9・　いわゆる第一次藤井教授問題再燃

一九五八(昭33)

3・14　武田文学部長の裁定により第一次藤井教授問題終局に向かう

6・1　中川秀恭教授が文学部長になる

一九五九(昭34)

2・25　石川道雄教授(独文学)逝去

11・13　文学部委員及び委員会に関する規定承認

一九六〇(昭35)

1・29　「文学部建物新営計画案」の原案承認

6・1　須田豊太郎教授が文学部長になる

一九六一(昭36)

6・9　知里真志保教授(アイヌ語・アイヌ文学)逝去

7・7　伊藤吉之助名誉教授逝去

10・6　いわゆる第二次藤井教授問題起こる

一九六二(昭37)

3・31　文学部に史学一講座増設(哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科六講座)

4・6　藤井教授問題に関し、文学部長から学長へ上申書提出

4・25　柏倉俊三が名誉教授となる

一九六三(昭38)

3・31　国立大学の大学院に置く研究科の名称及び課程を定める政令が制定され、北海道大学の大学院に置かれる研究科の名称及び課程は文学研究科(五年の課程)その他と定められた(4・1施行)

5・21　杉野目晴貞学長が文学部長事務取扱になる

5・30　文部省、藤井宏教授の分限免職発令

6・8　藤井宏元教授、人事院に不利益処分の審査請求

6・14　史学講座を日本史学、東洋史学、西洋史学各二講座に変更

11・18　藤井宏元教授に関し、人事院公平委員会の審理開始

12・20　東京大学金子武蔵教授が文学部長を兼任する

一九六四（昭39）
2・25　本学に置かれる学科及び課程並びに講座及び学科目が定められ、国立大学の大学院に置く研究科のうち五年の課程、または四年の課程の研究科の基礎となる講座を博士講座（○印を冠する講座、以下同じ）と称することになった（'63・4・1適用）。文学部の講座は次の通り
哲学科「○西洋哲学第一」「○西洋哲学第二」「○西洋哲学第三」「○中国哲学」「○インド哲学」「○倫理学」「○実験心理学第一」「○実験心理学第二」「○宗教学」「○社会学」、史学科「○日本史学第一」「○日本史学第二」「○東洋史学第一」「○東洋史学第二」「○西洋史学第一」「○西洋史学第二」、文学科「○国文学」「○中国文学」「○イギリス文学」「○ドイツ文学」「○ロシヤ文学」「○言語学」、一般教育等
7・10　ユーラシア文化研究室発足
11・27　藤井宏元教授、不利益処分の審査請求取り下げを人事院に申し出る
12・19　阿部武彦教授が文学部長になる

一九六五（昭40）
3・　文学部学生による文学部総合雑誌『胎動』発刊
3・17　「国史学専修科」を「日本史学専修科」に改称
3・23　文学部外国人教師ヘルマン・ヘッカーに北海道大学名誉博士の称号授与
3・31　文学部文学科に「○国語学講座」を増設（'65・4・1から施行）
6・16　文学研究科規程が改正され、「独文学専攻」「中国文学専攻」（修士課程）が設置される。（'65・4・1から適用）

一九六六（昭41）
2・25　文学部将来計画について十年計画案を承認（四学科三一講座、一研究施設〔四部門〕学生定員一五〇名）
4・5　学部付属の教育及び研究施設として文学部に北方文化研究施設（考古学部門）が置かれる
4・19　須田豊太郎が名誉教授となる
9・21　英国大使館文化参事官E・W・F・トムリン及び同広報担当参事官ジョン・フィゲスから北方文化研究施設分室として旧マンロー邸の寄贈を受ける

一九六七（昭42）
1・18　文学研究科規程の一部改正。「独文学専攻」「中国文学専攻」に博士課程を設置（4・1から施行）
2・15　北方文化研究施設規程制定
4・1　文学部文学科の「○イギリス文学」を「○英米文学」に「○ドイツ文学」を「○独文学」に「○ロシヤ文学」を「○ロシア文学」に名称変更
4・20　ヘルマン・ヘッカー名誉博士逝去
10・14　文学部教室研究室棟四六一二平方メートルの新築工事落成
12・6　新営建物へ移転
12・19　野田寿雄教授が文学部長になる

一九六八（昭43）
6・12　文部省令第一七号をもって、文学部文学科に「〇英語学」講座が増設さる（哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科八講座（4・1から適用）
11・12　猪俣庄八教授（中国文学）逝去（学部葬一一月一三日）

一九六九（昭44）
3・19　文学部規程の全部が改正され「専修科」を「専攻課程」に、専攻課程名中「国文学」を「国語国文学」、「英米文学」を「英語英米文学」、「独文学」を「独語独文学」、「露文学」を「ロシア文学」にそれぞれ名称を改める（4・1から施行）
3・20　文学部教室研究室棟三二八平方メートルの増築及び文学部管理棟七四〇平方メートルの新築工事が落成した
5・21　文部省令第一四号をもって、文学部文学科に「〇独語学」講座が増設される（哲学科一〇講座、史学科六講座、文学科九講座。4・1から適用）
8・4　文学研究科規程が改正され、「言語学専攻」が設置される（修士課程のみ。4・1から適用）
8・17　文系校舎封鎖される
10・30　封鎖反対の教職員・学生により文系校舎封鎖解除
11・8　機動隊により本部、教養部、図書館封鎖解除
12・19　小栗浩教授が文学部長事務取扱になる

一九七一（昭46）
5・14　学部長選挙規程改正
6・11　藤田宏達教授日本学士院賞受賞
6・30　文学研究科規程の一部が改正され「言語学専攻」に博士課程が設置される（4・1から適用）
8・1　鳥山成人教授が文学部長事務取扱になる
10・22　大場利夫教授北海道文化賞受賞
11・21　文学部研究棟封鎖される

一九七二（昭47）
2・14　研究棟、管理棟封鎖される
2・15　学年末試験四月に延期される
5・17　文学博士中川秀恭元教授が名誉教授になる
6・12　北海道大学文系学部（文、教育、法、経済）創設二十五周年記念式典挙行される
7・19　文学研究科規程の全部を改正する（4・1から適用）
10・21　文学部校舎封鎖される
10・23　北方文化研究施設陳列ケース爆破される

一九七三（昭48）
1・24　文学研究科規程の一部が改正される（4・1から施行）
4・1　梅岡義貴教授が文学部長事務取扱になる
4・12　北方文化研究施設に文化人類学部門が設置される
5・23　理学博士・農学博士井上修次元教授が名誉教授となる
8・1　『文学部ニュース』第一号発行
11・19　他大学との単位の互換に伴う学部規程の一部改正

一九七四（昭49）
4・1　梅岡義貴教授が文学部長になる
5・15　阿部保、井手貴夫両元教授が名誉教授となる
12・20　斜里町郷土研究会より北方文化研究施設分室建設用地が寄付される

一九七五（昭50）
4・1　塩谷饒教授が文学部長になる
5・21　文学研究科規程の一部が改正される（4・1から適用）
9・20　文学部創立二五周年記念式典挙行される
9・28　文学部校舎封鎖される（9・30封鎖解除）

一九七六（昭51）
1・22　文学部庁舎、一部学生により封鎖さる（1・24解除）
4・1　「文学部委員及び委員会に関する規程」一部改正
5・19　野田寿雄、本堂正夫両元教授が名誉教授となる
5・24　北方文化研究施設「斜里分室」落成式挙行

一九七七（昭52）
4・1　塩谷饒教授が文学部長に再選される
4・1　行動科学科が新設される（旧哲学科Ⅱを母体として哲学科から独立改組されたもの）
4・18　文部省令第一四号をもって哲学科「〇実験心理学第一」「〇実験心理学第二」及び「〇社会学」を行動科学科「〇認知情報学」「〇比較行動学」「〇社会行動学」にそれぞれ名称が変更される（哲学科七講座、史学科六講座、文学科九講座、行動科学科三講座4・1から適用）
6・13　文学博士福村虎次郎元教授が名誉教授となる
7・27　文学部規程の一部を改正する（10・1から施行）

一九七八（昭53）
4・1　永井秀夫教授が文学部長になる
11・15　文学部研究棟一三二一・七平方メートルが竣工した